古今集考證

一

特別
イ 4
3163
95 (1)

貴
14
3163
95(1)

を待て序

この巻を待ちおのもとやくもとひやしらふ
序のものしてなりへしもかるりこの糸うしも
ものの注釋なりあもとちうはくはかきとなりて
いうふくうしくそれはほとしもとも物和るもう
てちの巻紙ふふ書の名のしるとひのとく
ちとふ紙ふてて、をときなりの世のてろぬう紙
うの巻紙いふの世のうつ、の人のうしふ紙

むかひて世にふるまひをなすこゝろのおくのこゝろを
のこすこゝろをもくはしくいきのひ給さへふるまひて
ちかくこゝろのふかきことのこゝろのうつし詞を
かゝるこゝろの人のこゝろへきこゝろふかくこゝろのかゝの
世のこゝろこゝろ代のものとものこゝろふるまひ
こゝろをこの作のこゝろをいとをしくこゝろ
をこゝろをくおもひのふかのふかくふかこゝろしき
よのこゝろかこゝろをもおのをこゝろこゝろ せんく

かゝこゝろをのふかをこゝろおきこゝろをこゝろよの作のこゝ
こゝろをこゝろのこゝろしくおもこゝろふこゝろのこゝの
こゝろこゝを代をこゝろくこゝろをこゝをこゝろ仏こゝの
を代こゝくを世こゝをつくこゝ百こゝこゝこゝを名ふこゝ
その徒松のこゝ作ふこゝこゝこゝこゝこゝ百の徒ふこゝ
こゝふこゝこゝかくこゝ八本徐花のを秋

古今集遠鏡

宣長ぬし

うけたまはるとかいとこだちもとかぐそ
うけたまはるにみるのもみぢ歟

此書ハ古今集ぞと沉ぞくいるゝ弓乃俗(サトビゴト)伝ふ譯(ウツ)せ
ふしそとく此集ハよく小物よくもとゝのしく人こゝろちうさくども
のゝまくさきてのうまる物くもたくさぶ歟今さくちるうざハい
うあまぶとゝいふふ注釋といふちぢハくゝめくいとそるかるるさ
ゝ乃精ぞもゝあわとぶうハほのうふ乃ゆまどそのゝ本とぶゝゆや
ゆゝるるねをそのゝ心ちうゝ星人のゝ書ゝつゝ本ゝよるとゝもよ
くゝえまるふさてかまハくゝひくゝむゝ伊の本ゝまゝ本ゝを

とぶらちハ志らく〳〵。梢のあるやうハかく〳〵なむとやうに證見せらるむ
がたらしきるハいかによく志りていふつゞきにおもしろきをにも人だて
の耳ハうたがハしけれバちらくて見ゆるものまさしきにハ猶にあるべくも
あらざめる也。世にはとどめがたしといふなる物の所にしてうつしみるに
たいらにもわきもてなしたまで。くもしもにうつりきて枝さ
しものもえみじかき下紫の色のこきうすきまでのさるかなしえ
えらまて終近き定のうち急にことよりきものがたり見てけるぞかり
にみゆるにあらじや。今の世きき代乃らしの紫の色もなき俗きんだへ
さやもく〳〵。ま深の色にうつして見せしもうしこのめが孫
のなるとひにうなつらむ物をやがて此事ハ志らで尾張の横井千秋

ぬしめち。さやくらわもひもとめてきてるよりにて。ちぢめよわうきひき
てハ有けるものゝなかにうまれていふなれば。事志げきにうちすでに出て
えしもおりさんなにあまるは年へぬる也。いふにくしと志ぼしおぞろかなる
ことにおもふがたに思ひおこりてからみらく物しつる也。さればみ神代のまさ
おくを代々にぬしの様ぎてふでそ有しらむのゝ世をむともやうに。
志るらう川ともかくもまべくなれど。俗の心を深くまめなるらく
ろぎしハみくなし山乃神とハなしにさてあきべくもいつらばてあるべく。
○うひまなびなどのしるそにさきちうきくハいふにそらしくときさる
にもおののあぢはひを甘しからしと人乃かるる也。世しらむやう
ぞて自のいきおひでにをはのもらしれなど。さまかなる誤にいはか

て、猶ほ〳〵ふるえ行く様だ。生る程今あのぐんふのふぐでハさて
ほえぐるゝ如なるをさらびごゑ澤（ウツ）〳〵するハ、こゑゐみづゝさ男ふ
ふゑ〳〵して物の味をうづゝ形をて、ちまるぐぢ〳〵いゐ〳〵へ乃雅言（ミヤビゴト）
るゝ如おのぐちゝ〳〵ち間乃如ちゝ如なるまゝバ一うゝ如こまゝ如るんだへ乃。
こよ如〳〵ゐ〳〵ふえ〳〵ほゐこ〳〵おゐきぐかゝ。

○俗言（サトビゴト）ハかの母この星〳〵ちゝ如るこ〳〵おゐきぐ中にゝみやゐごゝゐ
ちゝきゝもゐゝまぐゝかゝこよ如るゐゐゐゐゐ〳〵ゐゐゐゐ
ゐゐ〳〵ぐゝゐゐバかゝ〳〵ほこゝふゐゐ男ひぐゝ。ちゝゐハ京ゐゐゐ如
詞して、うつをべきゐぐゝし〳〵ゐぐ〳〵京のゐゐをゐつゐきハゐ
て、なべゐ〳〵ハゐゐとかゝ〳〵。

○俗語（サトビゴト）ふゐゐゐぐ〳〵ゐる中ふゐ如ゐゐゐ〳〵ゐゐゐゐ
ゐ〳〵のいよゐきゐゐ如ゐハゐゐぶ〳〵べ〳〵又ゐゐゐ〳〵ゐてゐふ〳〵。
ゐちゐをゐゐゐゐ〳〵ゐぐひゐるをゐハゐゐふゐゐ情（コヽロ）乃ゐるやゐちゐふ。
なゐめ出ゐゐる如ゐゐバゐのゐちゐをゐゐ祖して、澤（ウツ）をべきゐ。ゐちゐけ
ゐゐハゐのゐ〳〵ゐいひ出ゐる如ゐて、みやびごゐのいきゐひゐいまゐゐ
〳〵ゐ〳〵ゐゐとバゐゐかゝ。又男ゐゐゐゐをゐ如の祖をゐゐふゐちゐ
ゐゐ〳〵ゐ多〳〵て、ゐゐゐゐゐゐふゐゐ〳〵ゐゐゐゐゐ如ゐるゐバ。ゐのゐい
きゐひふゐ〳〵ゐゐへゐゐ〳〵ゐゐゐ〳〵ゐゐ如ゐゐ。ゐゐゐゐをゐゐべ
きなゐ。又いゐゐゐゐゐかゐゐゐ〳〵ゐゐ如ゐゐゐゐ。ゐゐゐ〳〵ゐゐ
ゐ〳〵ゐハゐゐゐ〳〵ゐいゐゐをゐぶきてゐゐ。ワタシゐゐもいひゐ

シハといふべきを。ワシヤ。それハをソレヤ。それぞをスレヤといふたぐひ。又その
やうなるのやうなるを。ソンナコンナといひ。あらバあらバを。ぞきちぶきてナ
ラタラざらしては。ソシテ。よからうは。ヨカロ。とやうにいふたぐひ。ことばうち
とまるるなるは。ことさらいきほひにまかせてハ。丹くかうるはしく
いふかわハ。ちかく行われて。世のなかし。おほかるもぞなかり。
○すべて人の語ハ。ばじくいふてもいひざまいきほひにしたがひて。深く浅
くもをかしくもうれたくもきこゆるわざにて。歌ハことに。心のあるやうをたゞ
にうち出たる趣なる物なれバ。その詞乃はしばしいひざまいきほひハしも。
ことに耳にきゝしらるゝではえしらぬを。されバ詞のやうはよくあぢはひて。
よみ人の心をおしはかりえて。そのいきほひを譯(ウツ)すべきなり。されバ其

されバ里べにまげさしもしくいつるせばくりなれ。譯(ウツシ)のたてりしへく
へくし。笑ふ夢はをへるなど。さらにおのがいふなるくりふ(ム)もにも行る
ぞ。此下句なり。あちふむねていへる詞あることをさらさるてぞかし。かく家
あるをぶるへざれバ。くりふ(ム)もなき(ヘ)なるよしなり。わくりもなく死ぞし。
かく家さぐひ。いほくおぼしめきをしへてさとるべし。
○みやびごとハ。二つにも三つにもなりてあることを。さとびごとにて。合せて一ッ
にいふあり。又雅言(ミヤビゴト)ハ一つなるが。さとびごとにてハ二つ三つにわかれて家
もあるゆゑに。むかし俗言(サトビゴト)は。ことにもかはりにも行くるも行わ。又一つ
言の譯語(ウツシコトバ)なれど。ことかはりこと異なることもあるべし。
○まぎらはしくあれバ俗言なきなき詞にハ。一つに二ッ三ッをよく移てう

つをもて行り。又上下乃俗の澤の中ふ。をもしろくこもる。行とあるハ
二句三句に会せて。その句べてもをもしろ澤をもつ。そハとゝへバ。あ〻ぬ
らバさかゞやもて行〻ぬ橋ふあ〻めを。をもしろくなどゝいふ句あゞ。一つをあち
てハいふもうつをべき俗云ハ乃ゝ。ゞ二句に会せて。トテモイヤウニ早ウ散クラ井
ナラバ一向ニ初カラサカヌガヨイニナゼサカズニハヰヌゾ〻〻澤をるゞ〻〻。
○ふよりて。ふ〻の俗の作ぐきざる。てふをはあゞふかゝ〻〻でをべて
のをとをえて澤ひべきて行り。ふもの句つぎ。てふををなゞどかゝ〻〻まも
アてハゞ〻りて一〻ゝめをふう〻ハ行ゞし。ゝ〻〻へゞそゞ〻〻
やいをひこ〻〻ゝやいをむあゞ。句をまも〻〻ハ。去年ト云ウカ今年トイハ
ウカ〻〻澤をべゞ。さてハ俗云の俗ふ〻〻〻。去年ト云タモノデアラウカ

今年ト云タモノデアラウカ。とうつをぞよ〻〻行をる。又考ることゝ
ゝ〻〻〻〻ゞ。考ノキタコヲ云〻〻澤をゞをバ。あ〻りがを〻〻。まる〻
考タとハ。〻ゞひあをゞを。此句ハどの句ハ。ぬる〻〻をべき〻〻ハをを。
さを〻ひゞ〻〻ふふ。ゝるといいつるなをバそのゝゝをえて。キタ〻〻譯
をべきしが〻ゞをゞひゞ〻おわ〻〻ゝ〻〻〻〻ゝ〻〻さるゞ。
○句をゝへてうつをべきなり。花とえて句ゞ。ゝてハ。俗云ふをえてと
ハいをゞをゞバ。花ヂヤトゝ句澤をべ〻。ゝゞをゝ〻〻よ句ゞの句のを
ふるハ。俗云ふを。ゝ〻〻ふ〻ゝハいをゞ。ゝゞイフといへゞ。雖義ヲシテ居ルト
イへ〻〻澤をべ〻。ゝてふををゝ〻〻〻〻ゝ澤をべきもを。考ハ句ふ句
どのをもゞハ。考ガキタワイとガふふ。此句をを。ゝ〻。又てふをはを俗ゞ

きとうて。花咲ふなどあどハ花ガ咲タイトガをそふ。されハ詠ハおかし。ち
べて俗ふハガくいふこゝ。雅ふちぞをとゝ。考ハガくいつて。花ガき星
あどハ花チイ里くノをそふ。又ちぶきて澤ちべきも有。人くガ見バぬきて
をゆゝむあゞしの。ちりゞをもゞ。澤ふ。あてくハ。ガくにちつ。
○河のそゝ。をおきゝへてうつちべきことおかし。あゞゞそやガくゝ心動ふ
あどハ。動ふ上へうつして。郭ふハ。ありオホウ。フテアヤウニ。カと澤。よるさ
へんよくてくに月新ち。ヨルデアヨトテ月ノ新ガテラスとうつ。ちちふ。
をふつちゝあちゝあゞひち。ちを上ふうつして。コノゴロハイロくトハ。ヒノ
シゲイ。カナくと澤。うちびくくもちるかるハ。ちるを上へう
ちして。ちんワタシタトコロガキツウ。アア物サビシウ。ルエ。カナくと澤ちとゞひふて。これ

雅ふ（ミヤビゴト）俗ふ（サトビゴト）くいつやうちゝあゞひし。又ちふをそも。ちゝ。ちをかへくと澤
ちべきちつ。ちゝあちゝかるひふ。當ぞなくガど。あうかるちふぞとゞそも
ゞハ上ふわるべきことガちゞ。さハいひゞくにあふ。當ガち下ふおかるちの。
ちちちちをえて。澤（ウツ）ちべきし。此俗ふ。皆ガちくゝ。ゞべく。
○ちふをちちる。ゞもゞハ。澤ちべき。何ゞ。とゝハ。ゞ。ゞ。ちちふ。ちひる
のゞに。ゞふカ（ラ）をへるゞちる。俗ふハ。花ガくいひて。ち。ちふちくをいも
ていきちひて。雅俗のゞちふ。ちるくガるを。ちちふいふいきちひハ。ち
ちハ出ちゞくもちくゞれバ。今ハサくいふ。辞を。ふへて。ゞふあて。花ガサ昔
ノふくくと澤ちゞ。ゞもゞの俗。ふ。ちゝ。ちゝハ。ちひゞ。ゞ。大ちと二つ。ちる中ふ。
花ちゝちちちめ。ちさへちゝ。ちゝ。ガゞやくふ。むへてふちるハ。さゝびゞ。

もうじくるといふ所。今一つ山風にてそみだるべらなれ。宮とのまてそ花ハ
ちるらめなどのさびひ乃てそハ。うつをべき詞なし。そまハぞふいとちりきれ
なぞの御らしよわり。山風にぞそろし。宮とのまぞそろし。といひしるむふいく
なくぬちさびひもうつらぎまかし。きるをちひていさくらぬきぢめをもわう
むとちまかみくにうろくぬるてし。るぬが袖ふるしやどの梅ぞも。意も
ちるかな。ぬどのるさびひの色もがハ。マアと訳を。マアハやがて此色の移ウツる
ふぞわらむ。疑ひのやもじハ。俗語りハ皆カといふ。詞のはぎきしるぬか
らふわるハ。そのをてへうつしていふ。春やとれ花やおそきとハ。春が早イ
ノカ花ガオソイノカと訳すがよろし。
○もそ俗言ふをちべて皆ウといふ。まんゆゑんをコウイカウといふなり

きんなんあどのんもりじ。花やちりきんハ。花ガチツタデアラウカ。花やち
りなんそ。花ガチルデアラウカと訳ス。ちりきて此。チツタデといふて。チルデといふて
のかつもゆもて。きんとちりんらの字がきんをもきまろべし。さて又俗乃
つゞきる詞らしふあるんそ。多くハうつしがぐし。るえぞえん人そえよ。
ちりんも後ぞ。ちるらんに注ぬおどのるさびひ。人へつゞき後へつゞきにて
はぎきそしんハ皆なうらにきり。此類そ。俗語りハえル人ハ。チツテ後ニ。
チル小世ノとやうにいひて。見ヤウんハ。チルデアラウ後ニ。チルデアラウに世ノ。などハいそ
ざまがし。ぬるに此類をとも志ひてんなんらんの字にあふに訳さを
となるが。萩なん後ぞハ。オツヽケチルデアラウガソノ萩タ後ニサと訳し。ちるらん
小野のまそ。サゾメテ此ゴロハ萩ノ花ガチルデアラウガらん世ノとやうに訳すべし。ぬ

きぐと。俗俗めさいそぐれば。中〳〵ふうそ〳〵。ほどもなく〳〵。考歳〳〵ち
かくをらん。山乃橋を渡ども。山ノ橋ハ歳ガカクシテアルデアラウニと。澤してよ
ろ〳〵。又うめろん人をよよ渡ども。ろんヤウトも人ハ〳〵うつをバ。俗俗ろも
かをへ。ほ。ふめきるにうてハかう〳〵やう〳〵ふうもなし。
○らんの澤ハ。ふきぐ〳〵ろう。考〳〵ふの風やそ〳〵らんをぐハ。風ガトカスデア
ラウカ〳〵。澤をアラウらんふわ〳〵ろうカ上のやふわ〳〵ろう。いつの人やふうろひぬ〳〵
んをぐハ。イツノヒニ義テシニウタコヤラと。澤を。ヤラ〳〵らんふかう〳〵きろ。人ふをうきを
ぬをやさ〳〵らんをぐハ。人ニシラサヌ花ガ咲タカシラヌと。澤を。カシラヌやそ〳〵らん
〳〵ふわ〳〵をろ。又上ふや行をぐ〳〵ふ。うをぐひををたて〳〵らんと。渡ぐ〳〵る
ふハ。ドウイフコデと〳〵ふ。泪ををへ〳〵。うつをもを。又お渡のゆふつけをも

ほぐ〳〵。人やを〳〵きをの〳〵呼〳〵んを渡ども。人ガをシイヤラ声ヲアゲテヒタスラナク
と〳〵うつをて。こをハをぐめのらんの結ひを上へうつて。やと会せて。ヤラと〳〵ふし。
ヤラハをを。をちやらんと〳〵ふ。又おうづ〳〵今ハ〳〵ふ〳〵や吟風乃をふも
人のきををんぐ〳〵んを渡ども。ぐひをほど〳〵上へ〳〵ふをて。やと会せて。ヤラ
と〳〵澤して。下るをば。一向ニオトヅレモセヌと。をを〳〵つをてをぐむ。をを〳〵ハらん
と〳〵をぐるるハ。上ろ〳〵行ろて。下ふをを〳〵ざをバをるを。
○ら〳〵ハザウナと。澤をザウナハ。をを風をる〳〵ふて〳〵渡ども。考後りサウと
ひ。ふををぐるし。渡をバ言めを本のをとを。ら〳〵ほど。おもむきろ
わるる辞し。ふを〳〵人で。物ヲ思ウサウナと。澤をぐめき。ら〳〵も
サウナを共ふ。人の物思ふを方渡をを。ん。ろ〳〵をを。ろ方渡をバし。ををついで

かいそむハ。学ぶらんとらしきを。よく疑ひの意にして聞きゝ分る事のこと
なれて。みだりに時分にも。ちらう所もそよむあるハ。ちがひても。ここへも時分
ぬるらんハ。時分ガフルデアラウも。時分ならしハ。時分ガフルサウナの意にて。此俗言乃
アラウとサウナとの意に従ひて。その分ちわるゝに従ふべし。
○加哉ハ。さらびでふかもカナといへど。俗のつゞきがあり。雅言時すくふでもろう
るれが多かれバ。俗ぎる詞をバ。下上ありおきかへとしおるハ。言へどもとへまどふ
してて譯せべし。さべて此辞ハ。歎息(ナゲキ)の詞にして。心をぬくゝ見るゝをおも
はれバ。僻(ウツシ)ありハ。そのふくめるゝ意の詞をも。くはふべきことなりと。
○俗への譯ハ。るぐしありて。又君ハあかりつなどいひすて。とぢめて上
へかへるハ。テと譯して。下にふくみるゝ意の詞をくはふいひすてゝしるる

俗くハ。然(ス)下にぬくめるゝ意を詞をバ。そのぬくめるゝ意ハ一(ヒトツ)ちもに類ありてちうる。
○きりきるきとハ。ワイと譯せ。例へバきぬらるとも。君がキタワイといへるが
ごとし。まことその結びにもワイをそへていふ。俗のきるとも
ぶるならしふわるきるきとハ。てふ譯なるべし。
○なるとなるなりとハ。ヂヤと譯せ。ヂヤハデアルのつゞまりて。ルのはぶかり
たるにて。さるあふ。東のいひにてハダといへり。なりもまたふわりのつゞまり
たるなれバ。俗言にチヤダとも。また一つ意にも。又一つ。例へバたとへばわる人わる
虫の声をなるとハ。すべてのものゝなるとハ。すべてあるすがたにも見えていふ
詞なれど。ことハ。アレ君がカヘルワ。アレ松虫ノ声ガスルワなど譯せべし。此なるとハ。チヤ
と譯をなりとハ別(コト)にて。俗のつゞけがたきもかくあれり。チヤとうつせる方ハ。俗く

詞よりうけ此歌にハ切て詞よりうくるにハあらず。

○ぬぬるつつるたるきなど既にいへるをいふ辞ハ俗言にハ皆おし
なべて夕といふなりぬなりぬるをバナツタ、来つ来つるをバキタ、見けりけるを
バ見タ、ありきありしをバアツタといふがごとし。タハタルのルをはぶけるなり。

○あはれをアヽハレと譯せる所多し。あはれハ何事にまれいくよの
やどりもやを何年ニナル家ヂヤゾヤ、アヽハレキツウ荒タワイと譯せる類也。かく
うつくしきにも何まれハもと歎かしき事にてもちかき今世の人乃歎息て、
アヽヨイ月ヂヤ、アヽツライコチヤ、又ハレ見事ナ花ヂヤ、ハレヨイ子ヂヤなどいふこの
アヽとハレとをつゞけていふ辞なるべし。あはれてふ詞あるにも
やらじ。さやうにハ花を見る人のアヽハレ見事ナといふも詞を何やらの
櫻へやらじとし。何を捨てふるまうて世の中波ぞくハ、アヽハレオ
イトシヤト人ノ云テクルル詞コソあらましと。大かたこのうたのこゝろてんぬべし。さてそれ
より移りてハ何事にまれアヽハレと歎息するよし名づけもあり
てなげきもあはれとも云ひつゝねぬれども多く添へつゝいふそのしく
ひのあはれハアヽハレと思ふ心を添えていへるなれバ俗言りハしてにアヽハ
レとハいふべし。そハ又その思へる事もちにまさひて別に譯言有るべし。

○なべて何事にやもかなるするにもアレ或ハアノヤウニ又ソノヤウ
ニなど、じごとなるするにハコレ或ハ此ヤウニなどいふ詞を添て譯せる
ことおほきハもとすちおもむき深くきこゆ世やしとてなり。

○抑かくよせてしも詞をぬいしなさる。又抑乃縁の詞のよしなどすべて詞乃

うへのよりの詩を雅言と俗言とハ古くより雅ハ俗にかゝ
しさる詩を俗言ゆうへなれども言葉うつくしきさまを言ふ
○枕詞序詞ハ言葉をかざりて雅言なれ
俗にてハ言葉入まじりて中くにまぎらかしそもそも言の詩
かゝる言葉ばかりをハその詩にもちゐて俗言
○此物語の書体やう譯語（カタレコトバ）のかぎりハ片假字にもちゐ假字づくし
言葉ハ仮（カリ）よきふまかをくるとき譯（ヨミ）ハくるふをり〳〵平假字を
てちひさくかきてくるハ言葉中の詞なれ〳〵ハ此詞ハ
くいふこゝろ猶くふゝをえせるし歌のもじハ五句ゝるし又かゝへ
ふ長くも短くも節を引くるハ言ハ長き詞なるをそへていつる歌のなる

なるもそもくさ〳〵を長く詞をそへるゆゑハさべて言ハみもじ七もじ
ゝもじとかぎりあるもハ今も昔も異ふかはまるべきふべき詞ハ
こゝろもおわりをハそれさべりえておぎなふ屋〳〵又さ〳〵ふそへ
きと言べく又うひまなびのそもとがゝなかのおもむきを
ふもせむとて
一 二 三 あるハ 上 ぎ〳〵きるきるハ枕詞序詞ハ譯
をそなぶるそへ詞を言めせるし但〳〵ひきかゝ〳〵ひきかゝ人のよく
枕詞ハ歌ハ此ハ言葉ぶりハ一三三ハ句ハつゞ上〻上の句し
○うつ〳〵（コトバ）詞ハ言葉ぎて言ハ譯の及
びゞくて〳〵ふ〳〵ばるハ〳〵ハ言葉を書こゝろ
〳〵ハるゞもいつくうづいつるなり

○たゞいにしへ乃みやび今の世の俗言(サトビゴト)にうつしてちかくきかせては。
猶いかにしれてくも。いと多かるもどきのみは。うすき心綾だ。なほしらへても
ちかく猶とみるもかうして今はことかもいはでいふのこと。又今さらめさ
聞べての譯(ウツシ)ぶともなり中にもなほよく考へなば。いまあらしよくかられ
ることどもいでくべきをもどいふないつて。此なかのゝは。えさしもかく
づらはで。しかじか一とほり思ひよせるまゝに物しつるを。おもよく見む
ものも人。なほまはしくるを思ひえられむぬしもあらば。よくへもえ
ぶきも。ありしこめしてよかし。

本居宣長

やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことの葉とぞなれりける

○哥ト云物ハ人ノ心ガタ子ニナツテ イロ〱ノ詞ニナツタモノヂヤワイ

世中にある人ことわざしげきものなれば心におもふことを見るもの
きくものにつけていひいだせるなり

○世中ニカウシテ居ル人ト云モノハ イロ〱ト事ノ多イモノヂヤニヨツテ ソノナニヤカ
ヤノ事ニツケテ 心ニ思フコトヲ ソノ時見ル物ヤ聞物ニツケテ 云ヒダシタノヂヤ

花になくうぐひすみづにすむかはづの声をきけばいきとし
いけるものいづれかうたをよまざりける

○花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ 水ニスンデアル蛙ヤナドノ声ヲキケバ ソレ〱ニ面白イ
トコロハ皆哥ヂヤ スレバ生(イキ)テアルホドノ物ハ 何(ナニ)ガ哥ヲヨマヌゾ 鳥類畜ル

イマデ皆メン〳〵ニソレ〳〵ノ哥ヲヨムヂヤワイノ

ちからをもいれずしてあめつちをうごかしめに見えぬおに神をもあはれと思はせをとこ女のなかをもやはらげたけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり

○チカラモ入レズニ天地ヲウゴカシタリ 目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感ジサセタリ 男ト女トノアヒダヲムツマシウナルヤウニシタリ アラ〳〵シイ武士ノ心ヲヤハラゲタリナドスルモノハ哥ヂヤ

このうたあめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり

○サテ此哥ト云モノハ 天地ノハジマツタ時カラデケタワイ

あまのうきはしのしたにてめ神を神となりたまへることをいへるなり

○ソレハカノ伊弉諾伊弉冉ノ尊ガ 天ノ浮橋ノ下デ 此夫婦ノ神ニオナリナサレタ事ヲ オヨミナサレタ哥ノ事ヂヤ

しかあれども世につたはることはあめにしてはしたてるひめにはじまり

○サウヂヤケレドモ シッカリト哥ト云テ世ノ中ニツタハツテキタノハ ［ひさかたの］ 天デハ下照姫ト云神カラハジマリ

したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとの神のかたちををか谷にうつりてかかやくをよめるえびすうたなるべしこれらはもじのかずもさだまらずうたのやうにもあらぬことども

○下照姫ト云神ハ 天若彦ト云タ神ノ御内(ゴナイ)シヤウデアッタ ソノ哥ト云ハ 下照姫

ノ兄ゴガ 鼻外ウツクシイ 神デ ソノ身ノ光リガ ソコラノ岡ヤ谷ヘウツイテ照リ
カヾヤイタコトヲヨミダエビス哥トイフガアルガ 其ヲヨミデアラウ コレハ文字ノ数ナドモ
定マツタコトモナウテ 哥ノヤウデモナイコトゾモヂヤ

ちはやぶる神代ハ哥もじもちぐさまくしてもあるかなかりきゝ

○ あゝ哥の 此國土デハ素盞嗚ノ尊カラサハジマツタワイ

○ ちはやぶる 神代ノ時分ニハ哥ノ文字ノ数モ定マツタコトモナシ コトノホカ古風ナコトデ ドウイフコトヲヨンダモノヤラソノ哥ノ心ガ今見テハ ワカリニクイコトデアツタサウナ
人の代となりてちさめを乃らちくらりぞみそりぐつのかゝ

もゞハよゝきる

○サテ人ノ代ニナツテカラ カノ素盞嗚ノ尊カラ始マツタ哥ノトホリニ 此一字
ニサヨムコトニハナツタワイ

ちぐさのをちみづとハあるてるおゝ神めたこのうゝし如くちぐさ語を
むらくもいづもやえ妻こめ
やいろの妻ちくりをとゝもよみ給つるなり

○スサノヲノ尊ハ 天照大神ノ兄ゴ様ヂヤ シテソノ神ノ方ト云ハ 女ト一所
ニ住ナサレウトテ 出雲ノ國ヘ神殿ヲオタテナサル、時ニ ソノアタリヘ八色ノ
雲ガ立ツタヲ神ノ発ナサレテ オヨミナサレタ哥ノコトヂヤ
八雲たついづもやえ垣つまごめに八重垣つくるその八重がきを

○アレイクヘモ雲ガタツタ アノ出ル雲ノ八重垣ワイノ 吾妻ヲ入ル宮ノタメニ アレ雲ガ八重垣ヲ作ッタ アノ八重垣ワイノ

いづもとハ。いづもくにでくづまりてづくなる。こゝハ國名みハ行くべし。

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれび露をかなしぶこゝろことばおほくさまざまになりにける

○サウシテサ 花ヲ賞翫シタリ 鳥ヲウラヤンダリ 霞ヲ感ジタリ 露ヲ愛シタリスルヤウナ心詞ガオホウサマヾニナツタモノヂヤワイ

とほき所もいでたつあしもとよりはじまりて年月をわたりたかき山もふもとのちりひぢよりなりてあまぐもたなびくまでおひのぼれるごとくにこの哥もかくのごとくなるべし

○キツウ遠イ所デモ タツタ一足フミダス足モトカラ始マツテイク月モ何年モカヽル所ドノ所マデモユキ 又キツウ高イ山デモフモトノチリホコリホドノ土カラ段々ツモツテ雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デ 此哥モソノトホリナ物デアラウ

難波津のうたハみかどのおほんはじめなり

○サテ難波津ノ哥ハ天子ノ御事ヲヨンダ哥ノハジメヂヤ

おほさゞきのみかどなにはづにてみこときこえける時東宮をたがひにゆづりてくらゐにつきたまはで三年になりにければ王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつりける哥なり

この花ハ梅の花をいふなるべし

○難波津ノ哥ト云ハ 仁徳天皇ノ難波津ニ御座ナサレテ皇子ト申シタ

時ニ東宮宇治ノ若郎子(ワキイラツコ)トオタガヒニユヅリアフテ帝位ニオツキナサレイデ三年ニナツタニヨツテ　王仁(ワニ)ト云タ人ガ　マチカ子テ　シヽキニ申テ　仁德天皇ヘヨンデ上(アゲ)タ哥ヂヤ　此ノ歌ニコノ花トヨンダハ　梅ノ花ヲ云タデアラウ

こゝをしへて、須賀直見がいひけるは、春宮をは、春宮と写し誤るしるしどもとなり。

あさか山のことばは、うねめのたはぶれよりよみて

○アサカ山ノ哥ハ奥州ノ采女ノタハムレカラヨンダ哥デ

かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、かはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみの心とけにける

○コレハ葛城王トイフヲ御用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ　國ノ守ナドガ御馳走申シタケレド　アレラヒガ麁末ナトテ　葛城王ガ　キヅウブケウニ思ハレタ時ニ　其國ノ采女デアツタ女ガ　盃ヲ持テ出テヨンダ哥ヂヤ　トコロガ此哥デサ　葛城王ノキゲンガナホツタワイ

此ふたうたは、うたのちゝはゝのやうにてぞ、てならふ人のはじめにもしける

○此ナニハヅトアサカ山ト二首ノ歌ハ哥ノテヽ親ハヽ親ノヤウデサ　子供ノ手習ノ始メニモマヅ是ヲナラウコトヂヤワイ

そもそもうたのさま、むつなり。からのうたにもかくぞあるべき

○サテマヅ哥ニ六ツノワケガアルヂヤ　唐ノ詩ニモ大カタ此六ツノワケガサアルデアラウ

そのむくさのひとつにはそへうた　おほさゞきのみかどをそへたてまつれるうた

○ソノ六イロト云一ツニハソヘ歌　カノ仁徳天皇ヲオヨソヘ申シタ歌

なにはづに咲やこの花冬ごもりいまははるべとさくやこの花

といへるなるべし

○難波津ニサクコノ花ガ　三　サアモウ春サキヂヤト云テサクコノ花ガ

○ト云ヤウナガサウデアラウ

ふたつにはかぞへうた

咲花におもひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて

○咲テアル花ニ　ウツカリト思ヒ入テ居ル者ノ　サテモイラザルヿワイノ　身ニ心労ナコトノデケテクルモシラズニサ

といへるなるべし

これはたゞことにいひて物にたとへなどもせぬものなり此うたいかにいへるにかあらむその心えがたしいつゝにたゞことうたといへるなむこれにはかなふべき

○此カゾヘ歌ト云ハ　言ル事ヲタヾコトニ云テ　物ニタトヘナドモセヌモノヂヤ　ソレニ此咲花ニト云歌ヲカゾヘ歌ニ出シタハ　ドウ云心ヂヤヤラ　ガテンガイカヌ　五番メノタヾコトウタト云所ヘ出シタ歌ガサ　此カゾヘ歌ニハ叶ウデアラウ

みつにはなずらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなば恋しきごとにきえやわたらむ

○オマヘガ今朝別レテ　二　起テイナシヤツタナラ　ワシハ今カラ恋シウ思フタビ

ゴトニ消ルヤウニ思フテタテルデカナアラウ　云フハ一体何ごと行るよろ〳〵

〳〵いへるなるべ〳〵

こゝハ拙ふも好きに〳〵へてそゝがやうふ好むわるとやうふいふし

けふよりかゝへりうとゝ〳〵ぞ

○けナスラへふト云ハ　物ニナゾラヘテ　ものノヤウナト云ヤウニヨンダヲ云ヂヤガ

けナ君ニケサト云ふハ　ヨウけウタトモ見エヌ

〳〵ものおやろうふこけまものごもりつふせくゝ行う妹ふいハだて

○養蠶（カヒコ）ノ〻ユニコモツテアルヤウニ　一　親ノヒザモトニ居テ外ヘ出ヌ娘ナレバ

ドウモエアハイデ　サテモ〳〵シンキナコカナ

かやうに好るやこゝにたそかうふべ〳〵む

○けヤウナ哥ガ　けナスラへふト云ニハけウデアラウカ

ようふハ〳〵ふうへう

ヨガ高ちよもむうもつきじけうとそ海乃濱ちはさごハよ〳〵つうそうも

○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ数ハヨミツクストヲテモ　オレガ恋ノこゝゲイ数ハヨミツクサレマイ

こゝハよろづ乃美本るきぶもあふ佐りて心を見そるしけう

しハかうも〳〵るうちうむ好きけもどちぶ　そのそへふ〳〵おなじ

やうなるもバうう〳〵さあをゝへるる好るべ〳〵

○けタトヘふト云ハ　イロ〳〵ノ美本ヤ多ケダモノナドニヨセテ思フ心ヲ見せタモノヂヤ

ソレニけワガ恋ハトヲふハカクレタ形ガナイ　タトヘふハ物ニタトヘテ云テ　アラハニハ云ハヌ

ヂヤニヨツテ　カクレタ形ガナウテハスマヌ　ヂヤケレモ始メノソヘ哥トヲト同シヤウナコナ

レバ スコシモヤウノカハツタ事ヲ出シタモノデアラウ

ちゑめがあるめ指やゝ煙風をつゝゝ思ひぬうとうゝゆみびきふ宮り

○スマノ浦ノ海士ガ塩ヲヤク烟ガ風ノハゲシサニ思ヒモヨラヌ方ヘナビイテイタワイ

世事形ぐやかるふべゝゝむ

○ケ事ナドガタトヘ事ニハ叶ウデモアラウカ

いゝゝにちゝぐゝゝう

ゐつちりめちゐきよ形りせぢいゝぢかり人乃ちめ紫うれゝかゝまゝ

○偽リト云フガナイ世中デアラウナラ ドレホド人ノ云テクレル詞ガウレシカラウゾ

といつる形るべゝ

こきはちとのゝのちりゝゆぢゝ元をいふちり ちゆ事めちゝちゝ

ふうゐつぢど ちゑうゝゝゝやいふぢゝゝせ

○ケタダコト事ト云ハ コトノトヽノウテタダシイノヲ云ヂヤ ケイスリノト云哥心ハ子

カラ叶ハヌ ケ事ハトメ事ト云物デアラウカ

心掛あゝゆで色沢えつるかる花ちるぢゝと風ゆちぬ芝ちゝ

○山掛ヲ腹一ハイ十分ニ見タ サテモアリガタイコカナ 花ノチルクラ井ノアライ風

モフカヌ ケツカウナ沙代デ丹

ケ事ナドガタダコト事ト云ハ叶ウデアラウカ

むつちゝいいちひゝう

ケちめちうべゝちゝみ乃ちゝちきちゝ侘ちゝりぢとちぢふ殿づちりせり

○ケハ屋形ハゲニモハ繁昌ナコヂヤワイ ハ殿ゝノツヘぐガ侘ゝト 三 三ツ

モ四ツモツヽイテ サテゝゝケツカウナハ普請ヂヤ

くいてるべし

ものハ器をほめて神ほつぐるしけ[illegible]ひ[illegible]くハえしだちなむある

○ゆイハヒあトゝハ はゝ代ヲホメテ ものヲ神へ申スノギヤ ソレニハ此殿ハトゝあハ

ドウモ イハヒあトハサ足エヌテイギヤ

毒日ゆふヒるゆつゝはゝ第代をいもふゝ[illegible]ハ神ぞもゝゝむ

こまゝゝやもゝゝかるふべゝむ おわよもむゝふヒかも[illegible]ゝん

えゝるはゞきもゝふなむ

○コレラチドノあが イハヒあトゝハ スコシ叶ウデモアラウカ ヽアタイテイ あノシテノ六イ

ロニ分レウコハ ドウモサウハワチラレヌコデサゴザル

今ゆよめゆゝいろふつきゝ乃ん花ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ふくゝ波ゝしてちるつけつゝ高波しまてまつしめ給ふ

○昔ハ代々ノ天子様ガ春ノ花ノ時分ヤ秋ノ月夜ナドニ云ヒ出シ イツデモ ツメテ

居サツシヤル衆ヲハ前ヘメシテ ナンデカジルニツケテハ 高ヲ上ルヤウニ作付ニシタ

ツルハ花をこふふてくるよりおきそ〻ろまどひあるハ月をこふふてち

ゑべきやふこゝろ波ん給ひてさう〳〵おろかしとそ〻ろ〳〵ゑも

○サウシテ或ハ花ヲ見タウ思フテ ヨリツキモナイ 所ナドニデ召ス人ハツテアルイタリ

或ハ月ニ執心シテ 月ニ行テハ 一ダ出ヌサキヤ 入テシマウタアトヤナド 間イノニ

案内モシラヌ所ヲアチラヘコチラヘトシテアルイタリスルヤウナ 風流ナ心ヲ ソノヨン

ダ哥デ考ヘテハ 発ナサレテ ソノ高ニヨツテ アレハカシコイ者ヂヤ アレハオロカナ

者ヂヤト云フヲ ハ存知ナサレタモヤウヂヤ 昔ハサ

花をこふふてくるつふよりやふこゝろまでまべて風流ふる

〳〵ゝ時ハ波いへるし給るか徒説ゝをを為るかこふふられるハ愚(オロカ)

こゝしさかしおろかるをこゝろ〳〵 花をハさてよめる高ハ花を色

てこゝを考へ為べるなるを こゝろ〳〵をおろかるかこのこゝろをさせバ

今一つかこゝろ方をいはでハおとこのそばゝ為ある方のこゝを

ひてやむべきよハ方ノばるをや

ちゝるのゝおかゝびくさゝをこふふとゝへたゝを 結 ふうけて君を祈ひ

○サテヌサウガリデナシニ サヾレ石ニタトヘタリ 筑波山ニツケタリシテ君ヲ ハ祈(オイ)リヤシ

よ給こゝびゝ月ゝ花ゝ波ゝ雪ゝ みんかゝ

○又ハ身ニ過タヨロコビノアル時ヤ 心ニアマルホドオモシロイヨノアル時ヤナド

ゆゑ〻ちりかゝりにけるを〻人をこひ松虫ちかふ友をたのび

○アルイハ又富士ノ山ノケムリニヨソヘテ人ヲ恋シウ思フコヲヲタリ　松虫ノ声ヲキイテ

交ダチヲナツカシウ思ウタリ

ゐる砂位のしろ松もたひおひろやうふおゞえ

○キツウ年ガヨツテハ　高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ松ト　相追ナヤウニ思ハレタリス

ル時ニモヨミ　あひおひしたゝ今の俗語ふもいふことゆてお追と

そハもゝ〻ゑびふ追と追ひとまるとより出るる云ふていくで

くれ芳辰もなく大〻と同じほど野るとふいて

をとこ山のむ〻〻思ひいでをとゝ

をいひてぞなぐさめそ乃流

○又年ヨツテハ男ハヨトコザカリデアツタ昔ノタヲヲ思ヒダシ　女ハワカザカリノ早

ウスギタコトヲ愚癡ニクヨ〻〻ト思ウヤウナ時モミナ恋ヲヨンデサ心ヲハラシ

タコヂヤワイ

又恋ちあ〻〻ふ花乃ちる沢ふ秋の夕美ふこのえ社為るとき〻

○又恋ノコロ秋花ノチルノヲ見タリ秋ノユフカタ木ノ紫ノオチル恋ヲキイタリ

ゆるハ〻〻ぞふかゞミれ新り〻ゆる雪と涙とを和ゞき

○或ハ後ノ新ニ見エルワガ白髪ヤ面ノシワノ毎年多ウナルノヲ見テ歎イタリ

苔ちゆ多乃ゆ沢ふて和ゞ身をおゞ為き

○草ノ露ヤ水ノ沫ノキエルヲ見テ　我身モアノトホリヂヤト云コヲ知テ驚イタリ

あるハきのふそちうえおゞりて時をう〻ひよふるびちく〻かるど

〜とうろ〜なり

○アルイハ昨日デハ繁昌シテ何ノ思ヒコトモナカツタ者ガ　ニハカニ不仕合サニナツテナニギヲシタリ　又モトシタシカツタ中ガ　ソエニナツタリシタトキ

つるハ松山の浪をかけ雲井ちかくなる秋萩の下紫をなゞめて

あらつきはちぎりたがへをうぐへ

○或ハ又末ノ松山ノ浪ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ　萩ノ下紫ヲナガメタリ　嘆ノ略ノ羽根ガキスル敷ヲカズヘタリ

つるハくまゝ井ちうにふ〜泡人うひよ〜ぢ川をひきて世の中をうゝきつるふ

○或ハ[くまゝ 竹乃]身ノウイタヲヲ人ニハナシ　嘉川ヲタトヘニ引テ世中ヲ恨シダリ

きつるふくいる何ぞの文とうひうれなどいうぐ

今ハぬぐちぢ山もくがりしぢ〜ぢなるとおぐ〜の格を造るおりとき

〜人ちの心のぞんをなぐさめを

○又今デハモウ富士山モ煙ノタヽヌヤウニナリ　長柄ノ橋モ又新シウ如ニタト笑ヒ人ナドハ別ニテ云ヨムバツカリデサ　心ヲハラシタフヂヤワイ

法ゑしを盡しとてる徒ハ色ぐてし〜盡なれど法きぬなりとこそいへ法ゑおりとハいそぐ雅ゑのうおり〜だ定ゆる格し

いる〜人よりかく法とるうちふも形〜の法ゆるとぞ色ゆうわふき

氣かのおりしよや云ちうを法を色〜ゆりるむ

○ズツト昔カラ右ノ通リ作ハツテキタウチニモ奈良ノ頃時代カラサ　別ニテヒロツタワ

イ　其ノ時代ニハ定メテ哥ノワザヲヨウレル知デアツタモノデカナアラウ

かのおほん時うゝおほきみの乃らぬるのもとに人まろなん

奇特ニ思ジるとなりまする

○其ノ世ニ正三位柿本ノ人麿ハ哥ノ聖人デサアツタワイ

ものハ美しき人を多をのらせゝうといふ歌べし

○コレハ一コトニ君ヲ合躰ト云モノデアラウ

秋乃ゆふ霧立田川うゝ紅ゝ紅ゝもみぢをバみうどの淵ノ目ふ錦と

見なし春ハあゝと吉野山乃桜ハ人まろがうゝろうハ雲

うゝとのゝなんおぼえる

○秋ノユフグレニ立田川ニ流レル紅葉ヲバ　ソノ奈良ノ帝ノ淵目ニハ錦ノヤウニハ見ナサレ

春ノ初吉野山ノ桜ヲバ人麿ノ心ニハ雲カトバツカリサ思ハレタワイ

又山のべ乃のうの人といふ人百々と云ふあやしゝゝふへ乃うきると

○又山ベノ赤人ト云人ガアツタワイ　コレモ哥ニ妙ナ名人デアツタワイ

人まろをのうの人が、みふゝゝむとかゝゝのうゑとハ人まろがうとう

ゝゝむとかゝゝ和せをきる

○人麿ハ赤人ノ上ニタツテハナリニクカラウシ　赤人ハ人麿ノ下ヘオキニクイクラ

サナコトデサアツタワイ

なゝゝけみうぢ乃ゆうゝ

ゝゝゝ川ゝ紅葉みぢて流るゝうゝゝバ錦ゝゝゝ

[illegible]

ほのぐらう〜の浦乃 [illegible] 雪ふ鳴が [illegible] ゆく [illegible] ぞ [illegible]

赤人

[illegible] 雪ふ [illegible] [illegible] 沖 [illegible] 一よ [illegible] ふき [illegible]

○春ノ野ヘスミレヲツミウトヒウテオレハ [illegible] タガ アヽリノドカデ面白サニ此野デサ一夜寐タワイノ

[illegible] 浦ふ [illegible] みち [illegible] バカ [illegible] [illegible] 沖 [illegible] [illegible]

○若浦ヘ [illegible] ホガミチテクレバ干潟ガ [illegible] サニ芦原ノ方ヲ指テ鶴ガ鳴テワタルアレ

此人〜沈おきて又 [illegible] [illegible] 人も [illegible] 伏 [illegible] [illegible] [illegible]

のよろし〜 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

○此二人ノ外ニモ又スグレタ人ハ代〜(ヨノ)代〜(ヨノ)時〜タエズサアリタワイ

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

○サテ代奈良ノ代時代ニデノ哥ドモヲ集メテ萬葉集トサ號ヲツケラレタワイ

〜ふいぶ〜へのもく [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

かの時よりこの〜多ハ [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

○其ハ時代カラコチヘ年ハ百年アリハ代ハ十代ニサナルワイ

〜ふいぶ〜へ [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

ところゝるがひりなる事ヲ乱

○其間ニ昔ノタモ哥ノワケモヨウ知タ人ヨシダ人ハ タクサンニハナイ ワヅカニ一人カ
二人トヲホドノコデアツタ チヤガソレモ タガヒニ得タトコロト 得ヌトコロガサアツテ
カノ人麻呂ヤ赤人ホドニ十分 雖ノナイ名人トハイハレヌ
今ハ世ノ人ハ ふるさとゝ思ふ人をば ゝやもとゝ思やう形をばいまゝ
○サテ今其人ノタヲ云ウチヤガ ものゝ内ニ官位ノ高イ人ノタハ云ノハ 色ガナヤウ
ナ物チヤニヨツテ ソレヤノケテオイテ
ものゝふのちきよふるめ名きゝゝる人も
○ソノ官位ノ高イ方デハナヒタカニ近イ代ニタノ名ノ サエタ方ハ
きゝハ僧正遍昭ハ高ノ ゝ人ハ えゝゝゝ ゝはてゝゝゝ ゝゝ

忘ルヽ加茂ノ社ノ形を見ていつゝ ふ人をこゝかもこゝ

○ニツ僧正遍昭ハ高ノテイハ得テアツタケレモ ニコトガスクナイ 物ニタトヘテイハウナラ
綸ニカイテアルオヤヽヲ見テ せンノナイコニ心ヲウゴカスヤウナモノチヤ
濃ミどり糸ぐるとかゝて 小萩を思ふもぬるゝ袖や那ぎさう
ちちは紫乃ふぐりふたまぬんもて形ふりハ蓬を思ゝ ひなむく
浅緑野ふてるよりおちてら老る
名ふ老でゝおまるぞ ゝ如ふ家ゝれおちるきと人ふゝ流み
ゝるとゝゝ ゝゝハゝめゝ ゝ流あるゝてゝとゝゝゝゝ ゝゝ
花乃色なゝてゝゝるひのゝゝゝゝゝ ゝゝ

○左系ノ業平ノ高ハコヽロガアヽツテ 何ガタラヌ テウドニボンダ花ノ色ハナウ

ナツテ　ニホヒノ沙ツテアルヤウナ

月やあらぬあきやむかしの春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして

大うちハ月をもめでぐらされぞこのたもとバ人乃おいとゝ那ふもの

秋ぬる夜ハ月をとゝ秋ぬるとハ
ぬ侍
ん色ハやをとゝでハあとゞ

あきゝ人乃よきゝぬきゝうんがゞ

○文室康秀ハ　何ハタノミデ　ヨノ躰ガソノ何ト相應セヌ　イハヾアキンドノエイキル物ヲ着タヤウナモノヂヤ

吹ゝふゝきべ乃草木ハ花をゝるゝしといふゝむ

係草ハみらゞの侍ハ忘ル

草係きかもゝハ谷ふ新ゝゝる日ハ色ゝ乃ふやハゝゝぬ

宇治山乃侍きせんきあとばをゝふゝてをゞめをゝりふゝゝなゝ

ぞいらゞ秋の月沈ゝふゝ何ゝゝきの色ふあゝるゞゞ

○宇治山ノ侍ハ撰ハ　何ガオクフカウテ　ソレテ始メトハテトノツリアヒガ二ツカリトセヌ　イハヾ秋ノ月ヲ見ルノニ曉ノ色ノデ、キメヤウナモノヂヤ

色ゞ色ハ色やこのゝ月をゝちぞきむ　学問ゝうぢ人をいふゝ

よ色ゝゝゝおゝく　ゝゝし　係ぞ　ゝゝ　をかよりてよゝゝゝゝ

○什人ハヨンダ哥ガ多ウハ侍ハラヌニヨツテ　アレヤコレヤヲ足合スコガナラチバトクトハシレヌ

をのゝこやちハいゝ〳〵のそらゝりひ色の流（ナガレ）ゝりのゝれゝるやう

ふてはよかるべいぞよと女乃肝やめるそろつるふいくゆうはに
よりくぬきをう肝乃多の肝まバ多るべし
○小野小町ハ昔ノ衣通姫ノ流ナラギヤ　アハレナヤウデ　ツヨウナイ　イハバ
エイ女ノナヤム所ノアルニ似タ物ヂヤ　ツヨウナイノハ女ノ多ユエデアラウ
ものいつぬまバや人乃そつくむ多くもりせぞさめぐしはしを
竜ゑでうつろふ花をよの中ハ人のうろはもうぞ乃りりる
うびぬまバ多をうゑ草の根を絶てきゑふあつバいあむうぞ思ふ
そくほゞとゑ花ハ多
ゆげせこゞくべきよひまりさくゞふのくをはふるまひうまてきるも
大ゑとはうゑぬしハ（コトバオチ）そめきるいやしゝいそゞくゆきあお

へ乱心人乃花はうゞふやきめるゞおゞ〳〵
○大友黒主ハオモシロイ所ガアツテ　多ノテイガイヤシイ　イハバ薪ヲ負テ井ル
ヤウガオヤヂガ花ノ木ノ下デ休ミデ居ルヤウナテイヂヤ　千秋云譯ふオモシロイト
序ふ頗有逸興と云ふふよりて補ふ　コロガアツテ〳〵あるハ高字
そゝべし此序ハふれふあるの詞のきしゝゞ落るゝ
ものいて高しにはハそれ乃ゑ詞ハ人ハしらぞや
続ふぶ之よりてゑしゆゑむゑ〳〵ゆる多ハたいやふゆるゝ
このふうはゝ人〳〵そはゝ名まゝゆる世べうおあるかづらはもひむ
ろごりをやしにはゞきこの紫乃ごゝふおわう是ど多ゝのゝ
おもひゝそのまゑまゝぬそうゞ
○此外ニモ名ノアル人〳〵ハ野ニハヒロガツテアル葛ヤ林ニシゲウハエテアル木ノ葉ヤ

ナドノゴトクニ タシトアルケレドモ 皆自分ニ哥ヂヤト思ウテ居ルバカリデ 実ニ
哥ト云モノハ久シイヤウヌヲバ知ラヌモノヂヤト見エル
かくばかりいるさへくるだにのこれるものとき
うらみたつるかぶるもあるかぬあり
○サテ右ノ通リデアツタトコロニ 浄當代上文孫ノ天下ヲ治メサセラルヽノモ
今年デ九年ニサナルガ
あるかぎりおもかんうつくしきこのほやしまのかぎりまでなが世ろに
おふれ出ぐるたちのぶ事ぢらぬ(侍)ふのはもとよりも忘ぐくおりまして
○ドコカラドコニデモモレタ取ノナイハ慈悲ガ日本ノ外ニデイキワタツテ イヅクノ
ノウラニデモニナソノハ(カカグ)蔭ヲカウムラヌ者ハナイ 雖有イ時節デ

よろづのよろづ沙きくさをいろもろくよりあつまりて
ふるかぬあるかに
○イロくノハ政事ヲトリ行ハセラルヽハ ヒニくニ 其外ノ一切ノ事(イツサイ)ニテヲハステ
アソバサレヌアリニ
いろくへの事沙とかをれど物のかくるをもおくるかたくて
今もとゝをるかくて後の世ふるに伝るまて
○古ヘアツタ事ヲモハ忘レアソバサルニイ 年久シウナツタ事ヲモハ取立(テ)アソバサウ
ト云ヒ忘デ 今モ伊勢ハバサレ又後くヘモ傳ハレト思ヒテ
延喜五年ヒ月十八日ハ大内記まさもとの伊書よりてのあ
づうときのたくゆきはきよりうひろさくらしおふしかふちよみ

つゆ霜ふつ身をみふのゝもぐゝ孫らふおやをゝもて

○嘉年延喜五年四月十八日ニ ワレラ宮人ノ者ヘ作付ラレテ

まれえうゝきうにいゝぬふるきうゝみぐゝをもゝめてゝ

らゝ色紙ひてなを

○万葉集ニ入ラヌフルイ歌ヲ自分〳〵ノ歌ヲモ集メテ差上ケヨスルヤウニト作セ

付ラレテサ

こゝもとがおりふくも梅をかぎてよわちぐめてほゝぎゝをきゝもゝ

ぢをゝつゝ書ゆえるふいゝるまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス哥カラウツメツテ部ゝヲキノ歌 紅葉ヲ折ル

歌 雪ヲ見ル歌ニデ宮季ノ歌

又佐乃乃かゝふつきて君をおりひ人をゝもいそひ

○又鶴亀ニツケテ君ノ御寿命ヲ長カレト思フテ祝ヒ申シレメリ 其外ノ人ヲモ祝フタ哥

秋萩を手ら成れて佐乃をこひ逢坂山ふいゝるてを留さいのわ

○又秋ノ萩ノ花ヤ夜ノ菊ヲ見テハ妻ヲ思ヒウ思フタ思ノ歌 逢坂山ニデ旅立

テ行テ手向ノ神ヲ祈ル歌ナド

つゝるハ寄を秋をふもいゝぬらさゝぐ枕をもむえゝ霜ひゝる

○アルイハ四季歌ナドノ歌ニモイラヌ イロ〳〵ノ雑ノ哥ニデヲサ撰ミニセイト作付

ラレテ寄ヲ取リ撰ニデ集メタ

をべてちうゝちゝまれをづけて古今和哥集いゝ

○ゝ歌数約合千首 此ノ数ガ古今和哥集トツケタ

かくこのうびあり名をうづもれて山下あやしくもえぬべき
ごとうらぶれおとろくばかりなるべし

○カヤウニ古今集ガ出来タデ　ふるのよの　昔ノ撰集ノ跡モ断絶セズ　そまのまあがの　ヨイ
哥ガ数オホクアツマツタコトナレバ
いまはのもとの川乃俤うちなるうぐいすみもまさるべけれ　いとのいと
ものうく物ゆかしびのもぞなるべき

○モウコレカラハ哥ノ風ノワルウ変ルキヅカヒモナウテ　次オニ此道ノ末長ウ繁
昌スルメデタイコトバカリガサアラウ
うぐいすまくらとなるべき花かふりひさしくかくしてひさしきん
のもとにあらはれをかしてきもばし

○サテ哀ヽドモガ歌ハ　ヨミ方ハ　ゆきのくれあ　オモシロイトコロモナイノニ　突デモナイ
名バカリ　秋乃よの　上手ナヤウニ云ヒハヤサルコトナレバ
おのがをしへあるこの井ゐる蛙がいとくまくらはうるほしつ侘ぶ
なるべし　ふれくあめくしかるわがほどを思ふ大井川　序にもうるほ
みじかくたんのうく後拾遺集序かと作をきうき給ふるとかうこと
伊勢ガ出来ルカ俤の色ヤ香の色ヤ中の明神ヤ　ことあ
ひとくいつの樽井の秋もうるほしつ侘べしといつの　又或人ハいとく
うぐいすまくらハうぐいすぶくらはれ侘るべし　おのがうぐいすがしく
いつてくれ　中古ヤ文ウ作ハ　今ヤフカ此ヤ　ありけり
うちうるべし　まくらの俤ところハうるしまくいつあき　ナメ　ゑれき

徒ふ月ひゝる俗ゐ見バ世間ハ[illegible]ふべきなりけり

かゝる人乃みゝふかゝるとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○此集ヲ（いまうしを）サテ〳〵結構ナ集ヂヤトヰテ　天ナ月ヲアルルゴトクニ作ギタツトンデ
今ハ此當代ヲヒタハヌト云テハアルマイワサテ　千秋云ふ〳〵へとハ後世よりつゐ古へ也。
まるうち此近世の代代をこそ也。

古今和歌集巻第一　連綿

春歌上

なるるうぐひすこゑまちきる日ら也

左京元方

年内に春ハきにけりひとゝせをこそやいとせこそやいとせも

○年内ニ春ガキタワイ　コレデハ　同シ一年ノ内ヲ　去年ト云タモノデアラウカ

ヤツパリ　コトシト云タモノデアラウカ

きるまちかる日よる　紀貫之

神ひらそむさびしらなみ乃風やそらにも

○神ヲヌラレテスクウタ水ノコホツテアルヲ　去ノキタ今ヲ日ノ風ガ　フイテトカス

デアラウカ

よき人しらぬ

鶯もとゝ〳〵

春霞たなびくやいづこみよしの〳〵山ゝ雪ハぬりけり

○春ガキテ霞ノタツタハドレドコヂヤゾ　見バ吉野山ニハ下ダ雪ガフツテ

ナカ〳〵春ノケシキハ見エヌガ

二條后ノ春乃ちぐめの花

雪ぬきうちふる春ハあふりとうぐひすぬきうる波いろやうく花ぬき

○下ダ雪ノツモツテアル処ヘ春ガキタワイ　コヂハ鶯ノ氷ツタ涙モモウトケルデアラウカ

鶯〳〵らぬ

よみ人しらぬ

梅ぐんにきかうぐひすを春かけてかまぐもいまぐ雪ハぬりけり

○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴ケレド　下ダ山ヤウニ春ニデカケテ雪ガフツテ

春ノヤウニモナイ　鶯ガきゞり春かけていまぐ雪ハくづくとし

雪ぬきうちふる春ハあふりとうぐひすぬきうる波よめる

素性法師

春ゝもてバ花さやうくむしゝ雪ぬきうちふる枝ゝ鶯乃なく

○春ニナツタレバ花ヂヤト思フテヤラ　雪ノフリカヽツテアル木ノ枝デ鶯ガナク

鶯〳〵らぬ

よき人しらぬ

ゝぐ〳〵ぬく〳〵そ光て〳〵きうきうきゝバきえ方へぬ雪ぬき花〳〵ふるゝ

○トウカラ花ノタヲヲ保ウ思ヒコンデ居ルガソレヱヂヤヤラシテ　春ニナツタレバソノ

下ヽ　雪サヘ下ダロクニ消ヌノニ　ソノ枝ツテアル木ノ枝ノ雪ガ　ハヤ花ニ見エル

此句古く伝聞とバ三の句をかりて見るべし。きりぎれとかやいふこと
なり。此格万葉ふ多し。然るを此集のごとくいつわりてハ、是ちがひ
細き耳ぶとぬかれぬべし。然るを後の人の、ハハの
説とんぢて、さかしらふ改めしるかも賞べし。然也。ごとく是べきまてハ、
結のらむとかをかひ見し。さもバ結を一本ふ見あるうとかるる
也。後うかまわひを思ひて。改めしるかやあらん。

かるくのいそくさんのおわきおわいはうちきくめ子ら

二條后ハ春のみやとにまのみやとも申ときこえ給ふ時正月三日
康秀ヲ
おほくふ先しておわせでかるあひぐふ日ハてりわぐ雪の
康秀ガ
かしらふふりかかるをよめを給ひ侍

春ハ日乃えりふわるる気あり

ぬんやのやとひで

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ雖有イハ恵ヲ蒙リマスル私デゴザリマスレバ　年ヨリ
マシテカヤウニ頭ガ雪ニナリマスルハサ雖義ニ成ルマスルコマリマシタ物デゴザリマス

雪ハふり雪ハふるめる　きのはるゆき

春ハもちこの先もち儀乃雪ハ花ハ花ハき置と花ぞちるる

○春ガタツテ木ドモノコノメモ張出ル春ノコロハヤウニ雪ガフレバ　花ノチイ里
ニモサ　花ガチルワイ　トニト花トハエル

雪ハちぐ先ふらめる　ぬぐるるぬちを取不

雪やうに花やおそきとまれるむらぐひをぐふる取ぐでも香うる

○ハヤ春ニナツタコナレバ モウ花ガサキサウナ物ヂヤニマダサカヌハ 春ノオソタガホドヨリ
早イノカ 花ノサクノガホドヨリオソイノカ 咲ナリ鳴タラ ソレデドチラヂヤト
云コトガシレウニ サテモマア咲サヘナカヌコカナ

春のちぐめはうる　みふめちぐうる

春きぬと人もいへども うぐひすの なからぬうぐひはわしとぞ思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレモ マダ咲ガナカヌ ナンデモ咲ノナカヌウチハイツマデモ オレハ
春デハアルマイトサ思ウ

宮ぬれぬきさらの文めちぐ会の方　添まさる

谷風ふきくる水ぬ　ぬるむ　ぬうちつげ　氷ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

○春ノ初ニ 谷ノ風ニアソココト トケル氷ノヒマグカラウチダス浪ハ テウド花ノヤウニ見
エルガ コレガ春ノハツ花ト云モノデアラウカ

花乃色を風ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　

シテサ　ヨガナク

。ふ秋云ヒ旬。もの〻かる者ふぞ。ヨのかく〻しつぶさこゆて。
ぞ。もゞハ。あゝる徐へ〻書てふこハし。此歌おわし。

よみ人しらず

歌さゝぼ

みさべちら〻ゑぬ〻きゝばうぐひすのかく事ハ歌あゝきく

○ワレハ野ヘニノ近イ所ニスミヒヲシテ井レバ　ヨガヨウ明テ　毎日アサカラキヽニス

春日野ハ草ふかなやきそあ草乃つるもられ是ゑもしも後ヨ

○春日野ヲバ今日ハ焼テクレルナヨ　三　妻モ来テアソンデ居ル　ゑモキテ遊デ居ルホドニ

かすゞが野ヨ　ちらぶ火ハ乃野ちる出てゑよいまゝくらかりてヨうゑはをても

○此春日野ノ飛火野ノ番人ヨ　出テヤウスヲ見テクレイ　ソチハ此野ニ住デ居レバ

タイガイ知レルデアラウガ　ウイクカガリアツテカラ　若菜ヲツミニハ来ウゾ

みゝうりハ花乃香ぐふきうえ花くふゑこゝ賢べ乃和ゑ和つゝ香り

○山ニハアレ雪サヘ二ダキエズニアツテ　松ナドモ白ウ見エルニ　京ハヤメツキリト春

メイテ　野ヘニヘ人ガデヽ　若菜ヲツムワイ

ゆづさらおゝて春雨乃ふゆりぬ明日さへふゝばヨう和ゆみても

○一　オレナメテ　ドコモカモ　春雨ガマヅ今日ハフツタガ　アスニ一日フツタナラバ　オ

ホカタ若菜ガツミルヽクラ井ニナルデアラウホドニ　出ヘ出テあ菜ヲツミウゾ

仁和のみかどみこふおまゝ〻る明乃人ふヨう和

ゆひる伊乃ち

天ガしめ春ハ出ふ出て和ゑ和ゑ和ゑヨゞ雪ハゆりつ

○ソコモトヘ進ゼウトおゼテ　野ヘ出テ此若菜ヲツンダガ　外ノ外　寒イコデ

袖ヘ雪ガフリカヽツテ　サテくナニギヲ殺テツンダ若菜デゴザル

[illegible]

[illegible]

○ワザワイ　春日野ノ若菜ヲツミニヤラ　アレ白妙ノ袖ヲフツテツレダツテ人ガイクワ

[illegible]

[illegible]

○春ノ着ル霞ノ衣ハ横ノ糸ガウスサニ　山風ニサミダレデアラウサウダエル

[illegible]

[illegible]

○イツモカラヌ松ノ青イ色モ　春ガキタレバ　一入　染メヤウニ　色ガミシタワイ

[illegible]

つらゆき

ヨゲセヒゲ　[illegible]

○一衣　春毎ノフルタビニ　ヨゲセヒゲノ　ヨゲセヒゲノ　ヨゲセヒゲノ

あさみどり糸よりかけて白玉か何ぞと人の問しまで

○アレアノ柳ヲ見レバ　ウスモエギ色ノ糸ヲヨツテカケテ　キレイナ白イ玉ヲ一ツ

玉ニシテツナイデ　サテモ〳〵見ルダナ　春ノ柳カナ

紙材　ろろ

詠しらぬ

よき人しらぬ

○雪ヤナニヤカヤ　多ノオモシロウサヘヅル春ハ　物ゴトニナニモカモ　改メテ　アメラシウ

ナルケレモ　オレガ山身バカリハサ　春ノクルメビニダニト　フルウナツテイク

をちこちの山もみどりに成ぬ　山中ふかおもつり船くをとゝぶこゑ

○アチモコチモ　紫内モシラヌ　此山中ニナニヤカ　呼子鳥ガナイテ人ヲヨブガ　ドコヤ

ヤラサテ〳〵ヒツカリトシレヌコカナ

雪はらをきて。あしへまかりきる人を見てよめる

元信　朝臣

春ちかしバ雪うへる野わらも　みちゆきぶりにあをやつてはし

○春ニナツタレバ　アレ雁ガカヘルワ　雪ハアノヤウニ　ソラヲトンデ　北西ノ方ヘユクヂヤガ

コレハヨイトコロデ　ユキアフタ　コトツテヲシテヤラウカヨ

かゝる雪のうめる

伊勢

春霞うちをたてゝゆく雪を花なき里にさくやうの人

○オツケ花ガサクヂヤニヤア　山ヤウニ春ノ霞ノタツタノヲ　見ステ〳〵イヌルアノ雪ハ

花トヽモノ、昔カラナイ里ニスミナレタコカイ　ソレデ花ノ面白イコトヲシラヌデ

カナアラウ　餘材・花なき里の説多し。

よみ人しらず

春たちぬ

きりつまをばゆきとふるへうゑもなりやそくふうぐひすみかく

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ　ソデ袖ガニホフノデコソアレ　コヽニ梅ノ花ハアリモセヌノニ

ケ袖ノニホフノヲ　梅花ガコヽニアルト思フカシテ　鶯ガ来テ鳴ク　好文多し

色よりも香こそあはれなれ　たれかおもひをしるしるべ　とか袖ぬしやどの梅ぞと

○梅ノ花ハ色モヨイガ　色ヨリ香ガサ　ナホヨイワイ　アハレヨイニホヒヂヤ　ケヤウニ

ヨイニホヒノスルハ　タレガ袖ヲフレタケ　ケ色ノ梅花ゾイ　ヒアリ

色ごとかゝ梅の花うゑじ　うぐひすなくまつ人の来ぬあやまちをする

○ムヤクナ　ヒヤニ　庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイゾ　花ガサケバ　アヽリヨウ匂ウデ　待ツ人

ハ来モセヌニ　ソヽノ袖ノニホヒニトリチガヘラルワイ　千秋云、梅ノ花ノ匂ヒ　おくゝ〜んばべし。

梅花しるしるとうゑしうゑしる人のとかむる色ぞ香ぞあはれ

○梅ノ花ノ下ヘチヨツト立ヨツタト云ホドノ「ガアツタガ　ソレカラ　人ノフシヨウツ

ヤウニサ　衣ガ香ニソヽツタワイ　キツイ匂ヒナモノヂヤ

うめがゑをたづねてよるる　第三條花のおもひよりちぎる

雪ぞ笠ぬふてうゑの笠をうてしかぐもむ花かくるやかく

○ソウタイ　笠ハツムリヤカホヲカクス物ナレバ　鶯ガ笠ニヌウトヲ云　梅ノ花ヲヲツテ

吾ガ年ヨツタ形ガカクルカドウヂヤト　ツムリヘサシテ見ヤウ

鶯ぞ

よそふのこゝろ　素性法師

○笠法一

○オレハアハウナ今マデハ　梅ノ花ヲタヾヨソニバカリサアハレ又タナコカナト思フテ居タガ　梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ　折テカウ近ウ見テノコギヤワイノ又〳〵ヨソニ見タヤウナコデハナイ　能樹ノ花

梅ノ花ヲ見てハ人〳〵おくりまる

そもの花

○此梅花ヲ　考様デナウテハ　誰ニ見セウゾイ　色デモ香デモ　ヨウ知テ居ル人

ガサ　ヨレアシハヨウシリ〻ス　ソレヲ知ラヌ人ニ見セテハ　ナニセンモナイコサ

う〻ぶ山みてよめる　つらゆき

う〻ぶやまふこゝもとゞまる〻ぞ春の花

○梅ノ花ノニホウ　考サキノコロハ　暗ク成山ヲクライ　闇ノ夜ニコエル時デモ　梅ガサイテアルト云コトハ　見エイデモソノ匂ヒデサ　ヨウシレルワイ

月夜ニ梅ノ花ヲ折テクレト　人ノいひ侍バ　よめる　貫之

みつね

月夜ニハそもそもとてなどうめの花をしらずしてぞ折るべかりける

○ハテヨイトコロヲ一枝　折テヤラウト思ウガ　ムヤウナ月夜ニハ　月ノ光ノサス所ガ　ミナオシナレヤウニ白ウ見エルニヨツテ　梅花ガソレデヤト　ドウモ見分ラレヌ　コレデハ　白ヒヲタヾテ行テサ　知ラウヨリホカハナイ

考ちよ梅ノ知ラウもをよめる

考の春ちやゝハかゝ〳〵梅ノ花色こそ見て称のやハかく匂ふ

○考続一

○春ノ夜ノ闇ト云モノハ ワケノタヽ又物ヂヤ ナゼト云ニ 梅ノ花ガ 暗クテ色ハ見エ
ヌ 香ガカクレルカ 香ハナニボクラウテモ居レハセヌ 色ハカクレテ香ハカクレネバ 隠レデ
モナレ居レヌデモナレドチラモ ワケノタヽ又闇ヂヤハサテ
三ヘカタ長谷ヘ 一サル タビニ トヽツタイヘい 名レウ中絵ニテ上ラ
そつきふきつづるこふ至どりきく人の袖ふ久しくやどらう
ズ井テ ソノ、チ 一タタビブリデソイヘ、イタヲイレタレバ ソノイヘアテイ上ユガ一ウヌニハ ヤヤハシコノ
でほゝへる傷ふいゝ見ものもばうれ袖のつるゝ一かくさうどち
トホリニサ三ヘカタノ三デアヒカハラズ レツカリトアルヤ一ロ上デナニテタビニ上デゴボハ ソコニ サイ
ふ時むやゝわハあるゝいひ出して結りれぬそゝふくて
テアル
是きる梅むきゝてよめる ちらゆき
人きいつさんもきゝしふるちはハ花をむすこれ袖ほひる
○人ハドウヂヤヤラ 心モカハラヌカカハツタカシラヌガ ナジミノ取ハ 梅ノ花ガサ ワシガ
ホタレバ コレハヤウニ 三ヘカタノトホリノ白ヒニ アヒカハラズ ニホウワイノ

あはれなるに梅ぞ乃ちきりあるゝ成を色哉

伊勢

春ぞふ流るゝ川を花空ゝてをゝきぬるゝ袖やぬるゝ

○流レテイク川ヘ 花ノ新ノウツヽタノヲ アノ水ノ中ニモ 花ガアルトヽテハ イツノ春
デモ ダヽサレテ 折ラレモセヌニ ララウトシテハ ソノ水デ 袖ガヌレルガ 今年モヌレル
デカナアラウ 頃ふるとなるハ京極院の歌乃ぬるまで
あふ時ぞ川と成るハ京極院の歌乃ぬるまで
上旬ニ三一ヶ月を次第してんなべし
年波へゝ花乃かゞみとなるゝハちるとかゝほをやゝもとつるむ
○年ヲ重ネテ 毎年春ハ花ノ新ガウツヽテ 花ノ鏡ニナル水ハ 花ノチリ

カルノヲ　殘ガノモルトニデアラウカ　花ノチリカルトニト　年ヘテ鏡ヘ塵ガ
カルトニト　河ガ同シ一ギヤニヨツテカウヨンダノギヤゾエ
用ゐきをしぐ殘の身をへてくるこゝふいもとふおるこゝさてけうはどハ俳潟殺
うつるべきさゝふわしぐぞや。

（イヘノ者ニ）
家うちきる梅の花のちりをよ名る

書うく

るとつくく見るもぬ女ゝを梅ぶいりのもゝ名ふうろひぬ〳〵む

（テ）
○日ガクレルトニテハ見　夜ガアケルトニテハ見ィシテ　シバシモ目モハナサズニ見テ居ルノニ
此梅ノ花ハ　イツノヒトニ　ケヤウニ　チツテシマウタコヤラ
打聞うつろふの説、かくふるし。　ふ紋云、び神々の二つのどハ、そのことなり、與ふハ〳〵ぞ。
宣長ぬきさの為ゝ為会好ゝ　よみくしられ

梅ガ為ニ袖ヲ　うりしてらどめてど考ゝもかゝとゝ好〳〵るし　18
○梅ノニホヒヲ　袖ヘウツシテトメテオイタナラバ　考ハ五テシマウタトニテモ　ソレガ
春ノ形見デアラウニ

素性法師

ちるを見てかるべきものゝうめなれどうつるひの袖ふる名ま名
○ハアチツタワトバカリ見テ　ソノブンデアラウコヂヤニ　ヒヨンナコヤ　白ヒガ袖ヘノコツ
タ　コレデドウモ数々梅ノ花ノコガワスレラレヌ

紀ちゝば

よゝびとゝ〳〵ぞ

ちりぬるを為をぶのるを梅乃花為〳〵きは乃ゝひ出ゝ世む
○梅ノ花ヨ　チツタリ氏　セメテハ香ヲナリトモ　ノコシテオケ　ソレヲ後ニ為ケ

トキ〳〵ノ花ヒダレグサニセウ

人の家にうゑる梅の花さかぬそ花をもとめん

ていよさく

おもしろき事をもとめもとめぬ花をもとめん

○春ハサク物ヂヤ〳〵ニナラウテ　人ノ年カラ始メテ知テ　咲タ山サクラ

花ヨ　ドウゾチルトニヲヲバ　ホカノ梅ニナラハヌガヨイゾヨ

散しなば

山ざくら人もとめぬ花なれば

○山ガ高サニコヘハ誰モ来テ見テ　賞翫スル人モナイ山梅花ヨ　人ガシヤウ

クワンセヌトテ　アミリツラウ思ウナイ　オレガ見ハヤシテヤラウホドニ

又ハ星ヲ人ハもとめぬ山ざくら

山ざくらわが見ふるさとば春かすみ　霞ふかも尾ふかもとちかくつ

○山ノ梅ヲオレガカウ見ニクレバ　霞ガ一メンニドコモカモ立テカクシテ　花ヲ

見セヌワイ　サテモイヂノワルイ霞カナ

染殿后乃おもひ人　花ゲ咲ク梅の花をちらせ給へふ

を見てよめる　　業平朝臣

年ノ内ニはるハきにけり　ひとせをこそ　去年とやいはん

○年数ヲ経ニシタレバ　ワタクシモイカウ年ハヨリマシタガ　サリナガラ　アナタノ

佐繁昌ナサレ　オ佐殿デ　カヤウニ花ヲ見マスレバ　ナニモ物思モゴザリマセヌ

なぎさの院ふてちらで咲えてよめる

世中にもえてさくらはなりわせば春はちるはのごとかくまし

○イツソ世中ニトシト桜ト云物ガナイナラバ　ケツク春ノゴブンノ心ハ　ノドカニアラウニ　桜ト云物ガアルデ　ケヤウニイロくト心ガサワゾイテ　去モノドカニオモハヌ

ゆく人しらぬ

ゆくへなくもとがなさくもむまれてもこむえぬ人のとめ

○岩ノ穴ヲハルケ早イ川ガナケレバヨイニ　ソレメラ内ニ居テ　エエヌ人ノタメニ　アノ川ノアチラナ桜ノ枝ヲ折テキテ　ミヤゲニ持テイナウモノヲ　川ガアルデドウモヲリニイカレヌ

心乃さくらをたてよめる　そせん法師

たてのゝやへ人ふりぬるとし桜花もまだくふるをわてあづかふをむ

○カウシテアノエエヌナ桜花ヲエテ　人ニタヾ咄スバカリデオカウ〻カイソレデハエメタカヒガナイホドニ　チンデニ折テ来テ　持テイシデ内ヘミヤゲニセウ

花ざかりふる京はえんやうてらを

エエ後をバ柳さくらをうえまぜてみやこぞ春はふゝきなりける

○ケ山ノ上カラカウエエ後せバ　柳ノ青イ色ト　桜花ノ白イ色トヲコキマゼテトシト錦トエエル　ケエウメニタトコロノ　京ノケシキガサ　春ノ錦トヲモノヂヤワイ

ちらぬ花乃もとふてとうめ老ぬるとく成なをぎれてよめる

きのとものり

色もうとにはむりとふさくらめど年ゆく人ぞかなしかりける

○橘ハアノヤウニ色モ香モ イツノ年モ同シコトデ昔ノトホリニサクケレモ 年ヲ
経タ人ハサコレトトホリニ若イ時トハ大キニカハツタワイ ひさかの三の月ちく
ら色ゞ〳〵いひてハいと〳〵うかなるひゞくたやうなるを橘をうちいきて
ゝ〳〵ちひ〳〵わときゝ給ふ。

をとるちゝをよ名ゝる ちゝゆき

ふきゝかとと色てをわつる春霞立うゝたゝる君山ちさゝ成

○此(九)橘ノアツタ山ハ サダメテ霞カ立テカクシテ 知レニクカラウニ タレガ一アラン
クシダヘテイテ折テキタコゾ

ふるれとあかぬ〳〵ぬふ人ふてしるてまつる

橘花ハ ふるさとしとのしゝきゝ山ハ人ひらゝ見ゆるちゝ春

○橘花モサイタサウナワイ一アアノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ見エルノハ
宮ゆきさいの会ふの会 友のゝと

みゝ〳〵ゆゝ山べゝちゝる橘花雪ゝとのゝぞ山やまゝれまる

○吉野山ノアタリニ咲テアル橘花ヲ見レバ トシトサ雪ヂヤナイカトトリチガヘラレ
ワイ

やよひゝうゝ月ゝ白きゝ〳〵ふみゝる

いせ

ちゝ〳〵ゝ春ゝ〳〵花る年ゝ〳〵ふも人のゝゝふゝ山ゝとやをぬ

○橘花コイツモノ年ハ早ウチルモ せメテ春ノ一月加ハツテ長イ今年バカリナリモ
人心ニメンノウスルホド ユルリト咲テアツタガヨイニ ナゼニイツモト同シヤウニ今年モ

早ウチルゾイ　此話白のてふを一格心例多〳〵冊の書をふ出せるが

ぐ〳〵　お芳いひざ蔵あり〳〵ていう殺るこそこそきく〳〵そわ

さく〳〵ぬ花乃ちくとふ。人〳〵くらはぐり多人のきくわ

乃るぬ〳〵よくきる　多人〳〵らび

つぐなりとゑふてそくふてもき梅も身にすれまる人もまちきると

○梅花ハアダナ物ヂヤト　名ニヨンメツテアレ　ナカ〳〵アダナ物デハゴザラヌ　一年ノ

内ニモ多〳〵ナラデハ　花ヨテトサヒヌ人ヲサヘ　キドクニ今日ニデチラズニ待テ居タワイノ

スレヤ久ニウ花ヨテモトサヒヌ　梅ノアダナ花心ヨリハ　梅ガハルカ一シレヂヤ

の〳〵

まふことだバ明日ハ雪ぐ物ゆ。消ぞハ雪ぐ花ぐこんまゝ。ヤ

○梅ハ　梅ハアダニハナイ　業平ヲアダナト云ニヒヤルガ　ソレヤ大キナチガヒヂヤ

ワレガ今日来ツタレバコソ　アノ梅ヲ花チヤトハ花レ　モシ今日来ラズバ　明日ハ

モウ雪ニカツテ降テシマウデアラウ　タトヒソノ雪ニナツタノガ　消ズニハアツタトテモ

雪ヂヤトコソ花ヤウケレ　モトノ花トハ花ヤウカヤ

ふ〳〵らび

ちるぬきばちふまでちる〳〵　ぬき地をふてそちく〳〵をうバをうて花

○梅花ハチツテシマウテカラハ　ナニボんタウ思フテモ　ソノセニハナイモノヲ　折ルナラ

早ウ今日ノ内ニコソ折ウナレ　明日ハモウチルデアラウ

をわろ〳〵バを〳〵ぎふもちるうちく〳〵むつぐやぐかりてちるまぐハえむ

○此梅ガアリたるサニ一枝折テえヤウカト思ヘド　折テ取ルノハ　イカニレテモニア

惜イヤウナ物カナ　サテ〳〵ナニトセウゾ　イヤ〳〵折レノハ惜イコチヤニ　ドヤウ木ノ下デ宿ヲカツテ居テ　花ニデハソノヽデアンヤウ

きはわりをと

櫻色にそめとハ物〻〻染てきむ花ハちる時ハ後ハ形見ゝ

○花ハオツヽケ花テニヽウデアラウソノ後ノ形見ニキル物ヲ櫻色ニコウ染テ著ヤウゾ　千秋云ハさゝ〳〵色といふハ櫻の花の色ふくいろ櫻色をいふかもあらじ

さくらゐの色乃さけるを見ては見ふまゝでまゝうの名人ゝ

みつゝ

よゝみゝ〳〵おくりをる

赤色がゝ花見がてゝふまゝ人ゝ義ハむ後ぞ忘〳〵かるべき

○コチノ花ヲ見ガテラニ見るテクル人ハ　花見ガテラノコナバ　花ガチツメラモ

ウ著ハヽニヽイヂヤニヨツテ　花テニヽウタ後ニサ　其人ガ忘レカラウ

亭子院の歌合の時よめる

伊勢

見る人も折き山ざくらゐ時ちゝ〳〵ほうゐ義ハむ後ぞさかまし

○亭テ見ル人モナイ山里ノ櫻花ハ　ヨソホカノ花ガミナ花テニヽウテ後ニサ　サカウコトヂヤニ　今ハドコデモ人ハ山ニ花ハアルヂヤニヨツテ　ソレデ遠イ山里ナド六誰モ見ニクル人モナイヂヤガ　ホカノ所ノ花ガモウ咲イテ居ニナツテカラ咲メラノイヤトモ言イ所デモ見ニクルデアラウワサ

古今和歌集巻第二 春歌

春歌下

霞しらぬ　よみ人しらず

春がすみたなびくやまのさくらばな　うつろひぬとや色のまがへる

○霞ガタナビイテ　霞ヘ色ノウツテ見エル　アノ山ノ桜花ガ　チラウトテヤ

ラ　霞ノ色ガカハツテキタ

まてといふふちごとにうゑる　花なくば何をかちらふ思ひまさしに

○チリカツタ桜ニ白ノ　ニハブクチラズニ待テクレトイフノヲ笑ヒテ　ソレデニハデモチラズ

ニ留ル物ナラ　何ヲ根ヨリ二サツタ物ヂヤトハ思ハウゾ　ソレデハモウ世中ニ桜ノヨリ

一サツタ物ハアルマイニ　惜イノニ早ウチルバカリガ　アツタラ桜ノキズヂヤ

のどかなるこころもちにて見てしかな　桜もさかばよの中をもうらやまじ

○ワルウナツテウザイト思ツテアラウヨリ　サツパリト思リナレニ早ウ咲テニハ

ウノガサ　アヽ　ケガウナツヂヤ　桜花ハ　世ノ中ト云モノハ　ソウイ何ニデモ長

ウアレバ　タナラズニハイクチガワルイ物ナレバサ

世里うしろめたくぞ　桜もちりはてまでにあひぬべき

○コヨヒハ此里デトヽラウツヂヤ　ヤウニオモシロイ桜花ノチルヽギレニ　内ヘ

イヌルヽラバ思ヒダサズニサ

うつりにけりいたづらに　わが身よにふるながめせしまに

○桜花ハサ　咲タワト思フタウチニ　ハヤカタ方カラ散テニハウタワイ　人間ノ

一生ノアヒダハ　ナニノモナイ物ヂヤガ　ソレニアヨウ似タコトカナ

偽ヲ遍照ラ上よみておらう事歟

梅ちるべらなもちらばそれ人の来ても見ぬくり

○遍照僧ガ大方此花ヲ見ニ来テクレル人デアラウト思フテ毎日〳〵ニテドモ見エヌ　ケフニデ見エヌカラハ、モウ大方見エヌノデアラウ　スレヤヨイウ梅花ヨ

チルナラ縁手ニ受テ上ヘサ　チラズニアツタトテ在所ノ人ガ来テ見モセヌニカヤウニヨミハエヒは月ニカケは已上

雲林院ウリン　ちらしは花乃ちりぬる成見てとめる

そらく法師　兼均

梅ちる花乃そら迄ちる雪ぞふりつくきえぬぞふたる

○梅花ノチル所ヘキテ見レバ　時節ハ春デアリナガラ、雪ガサ　チラ〳〵トフツテ　ヂキニハキエニクイ　考ノ者ハソノ人ノ消ル物ヂヤニコレハ正ノ雪デナイ　梅ハバナヂヤニヨツテサ

ふる秋云ふ白ハさら〳〵花のちるそらハくいふこ形をさハいとゞきれふ花とちるとき下ちハ雪ちらう

梅の花乃ちり結ぶ成見てよきぬ

そせいらし

花ちらは風乃やどりハくゆるる霞ふを〳〵よゆきてうゝむ

○サテモ〳〵アツタラ花ヲ　ケヤウニチラス風メガ　逗留シテ居ル事ハ　タレゾハ知テ居ル者ガアラウ　誰ガ知テ居ルゾ　オレニ教ヘテクレイ　ソコヘ行テ　ゾンブンニ恨ミヲイハウ

うらもんもそし　梅のむをよる

いぶ〳〵ゝゝゝ焼もちわかむ　一さうわかるとおもへば　人ふうれめうえてあむ

○けやうに梅ノ早ウ咲テ　こうのハアヽヨイ料簡ぢや　ドレヤ梅ヨ　オレモイツ

ヨニ咲テドウナリモナツテこうハウ　人トヱ物モ一サカリ　盛リナ時ガアツテ

ソレガ過テオトロヘタナラバ　老ボレテラツレモナイヤウスヲ人ニ見ラレンデアラウホドニ

ひしもちをきる人のまゝできてかゝりにる後ふようて花

うちゝてつゝゝる　ちゝゆき

一ぬえ〳〵ぬやゝゝる〳〵ちゝむりふをまちえてちゝぶちゝゝむ

○けるチヨツトキテあんテイナこやツタ人ガ　又ゴザルカト　今日一日ハこヲ待テミテ

ソレデゴザラズバ　チナラチツタガヨイ　梅花ヨ　大カタメ今月ハゴザリサウナ物ぢヤ

心のちゝゝ御あんてゝよある

ちゝ藤ちゝふかゝゝちゝもゝ〳〵ふちゝまゝぶゝふもゝるべきものを

○藤ハナぜニけやうに梅花ヲカクスヤラ　ユルリトゝルヿハナラズモ　せメテハ枝

カラチルアヒダナリモ一ア　ゝんヤウモノヲ　ソノるゞサへ藤デゝるヲ

ゝちゝをおひてゝるづひるゝふゝゝゝゝゝをゝ

〳〵こゝをしのゝ行ちゝるゝひゝふゝをゝる梅ちゝかゝふ

なゝちゝゝるゝゝんてゝある　藤糸ゝ藤ゝゝ

ゝゝゝちめしゝゝちゝゆゝ〳〵もゝゝゝぬゝふゝまゝちゝ〳〵梅もゝゝゝゝゝゝふゝゝ

○ワレハアニバイガワルウテ　帳ノ帷ヲオロシテ　ヒツコモツテバカリ居テ　春モ

イクカヤラ日ノヱテイクモシラヌ一二　咲メラゝんヤウ〳〵ト思ウテ　せツカク

待ツタ梅モ　ハヤサヤウニウツロウテニヽウタワイノ

東宮の雅院ホてさくらぬ花乃みハふちうてゐゞ

とゞろ波えてらわ〳〵ある　　をゞめ〳〵高世

枝よりもつゞふちうゆ〳〵もゆれバおちてもゆめわとゝろ波

○水ノ上ヘチツテ流ル梅花ガアレトツト沫ノヤウニスエル　枝カラモモロウ義タ

花ヂヤニヨツテ　下ヘ義テモ又同ク　アヤウニモロイ　水ノ沫ニサナルヂヤワ

梅のもゆちうゆゝをよゝ考　ちゞ〳〵ゆゝ

ちゞ〳〵ゆゝバさゞゞやハわ〳〵ぬ梅ゆゝ　ちゞ〳〵ゆゝ

○トテモサヤウニ早ウチルクラ井ナラバ　向ニヨテカラサカヌガヨイニ　ナゼニサカズ

二ハ井ヌゾ梅もハ　サヤウニ早ウ義テハ　ステ居ルコチニデガ心ガサワ〳〵トシテオチツカヌ

ちゞ〳〵ゆゝバの流いと梅ゆゝ　此句ハいづれも右の澤のこと

をはてゝべきし例を考へ合せて味ふべし

梅のちゞ〳〵ちる梅ゆゝ　ちゞ〳〵ゆゝ

ちゞ〳〵花ゝちるとぬるとおもへて人のうゝろゞ見る時あへぬ

○オレハ梅もハ早ウチル物ヂヤモ思ハレヌ　ソレヨリハ人ノ心ガサアダナモノヂヤ

ナゼトヱニ　梅ハ一ダ風ガフカヌバ　メツタニチリモセヌガ　人ノ心ハ風ノフクニデモ

タヾニ早ウウツル物ヂヤワサテ　　餘材下句のほゝ〳〵

ちゞ〳〵の花のちる波よゝる　きの友のう

ゆゝさわ〳〵のひゝとのゞきゝ考ゆゝ日ふちゞ〳〵ゆゝちゝ

○日ノ光リノノドカナユルリトシタ考ノ日ヂヤニ　ドウヱフデ花ハサヤウニ

サワ〳〵ト心ゼワシウチルコトヤラ

春雨(ハルサメ)ハ草(クサ)ノ花(ハナ)ノ露(ツユ)ヲ洗(アラ)ヒ

ス花泉

春風ハ花ノ咲テアルアタリヲバヨケテフケ　モシ風ハフカイデモ　花ハジ

○春風ハ花ノ咲テアルアタリヲバヨケテフケ

ブシノ心カラヒトリデニモチルモノカト　タメシテアヤウニ

さく〳〵のちるをよめる　元の内みつね

春〳〵のゝ野ゝぶかるを花いふちとう風のぬくらむ

○サクラ花ハ　ヒトリデニモ　ヒタスラ　春ノヤウニフルモノヲ　ソレサヘアルニ　ブザイ上

ドノヤウニチレトテデ風ハフクヤラ

ふるゝ人ハ思ひてかゝるべきにあらねど

ひらめ

○アノ梅ノアル取ヘ行テアテ折リタカツタケレバ　心ガ高サニエノボライデ　残念

ナガラオレハヨソニアイ〳〵　キタニ　風ハアノ梅ヲ心ニカセニスルデアラウト思ハレル

餞別山ゝの花ゝ

一女

散〳〵らぬ

春雨ハふるハ思ひぐうさく〳〵花ちるゝ〳〵よぬ人〳〵なりゆくバ

○梅ノチルヲ惜ミ又人ハナケレバ　ケヤウニ此節　春雨ノフルハ　世ノ人ノ

梅ヲヲレニデ泣クナミダカイ

亭子院ノ会ノ時ニ　ちるゆき

桜をちらす風乃なごりふるとあり好き人の宿ぞくもちる花

○桜ノチル時ニ風ガ吹テ、モ花ガ散ラク中デサワグケレキハ　テウド浪ノメツ

ケキギヤ　ソシテ海ベニナゴリトニフガアルモチゴリハ浪ガメツギヤガ　花ヲ

チラシタ山風ノアトノナゴリニハ　あノアリモセヌ宿ニサ浪ガメツワイ

なゝめなみりぞの浦ノ

ぬるちゆゝなちゆゝなゝめみやこゝる色ハうゝびをもて咲ケリ

○フルイ昔ノ都ニナツテシニウタヨけ奈良ノ京ニモ　ヤツハリ色ハ昔ニカハラズ都デ

アツタ時ノトホリニ　花ハサイタワイ

春ゆうゝゝてよゝるる　よゝみをもむきぶ

花の色ハ変ラズシテ春ノ山風ノ香ヲナリトモ　変ル中

○花ノ色ヲバ変ノ中ニコメテオイテ花セズトモ　セメテソノ香ヲナリトモ

カラヌスミダシテキテ　コヘモニホハセイ　春ノアノ山ノ風ヨコレヤ

宗鑑時ノ歌ノ詞ノ書　素性法師

花の香ぬきさの高ちゆ会ちゆ

○花ノ咲ノ本モ　モウ今カラハ　ホツテオキテウヒニイ　春ニナレバ花ガ咲テ早ウ

ウツロウ色ヲ見ナラウテ人ノ心モウツロヒヤスウナルワイ

ぬゝ春ぞ

よゝ人ゝゝ見ぞ

春ゆ色乃いゝゝゝゝゝぬ里ハあゝゝ咲ちぐるもちゆゝゝむ

○春ノ色ハドコモカモヒラ一ニイナバ　イキワタツタ里トイキワタラヌ里トノ

ワケヘダテハアルマイニ　ドウヱコデ　花ハ咲タ散トサカヌ散トガアルヤラ

春ゆくとそしらめる　つゝゆく

三輪山を志ゝとかくしの春ゲ志ゝと人ゝ志ゝとめ花やちくらむ

○サテ〳〵三輪山ハキツウカスンダ　カナ　山ヤウニ　ア震ノ隠スノハ　此山ニハ

人ニシラサヌ　ナイショウノ花ガアルカシラヌ

うゑんのみをめもとふ花えふきゝ山乃おそりふ

まかゝりる時ふよめる　そきん

ゆゞりの春ハ山べり　ゆゞ足ハむゝとあバ春ハ花の陰ゝハ

○ドレヤケフハ　日ノクレルニデモ　山春ノ山べヲカケアルイテアリバウゾ　日ガクレタトテ

モ　花ノ陰ガナサウナカイ　イクラモ花ノカゲガアレバ　モシ春セタナラ　サイヒチヤ

花ノカゲニトニラウワサテ

いふ泊し　ナ実形げの従ふ志ゝ　なげハなハ春ゆし　げハ何げとおゝ

春ゆ春あゝてよゝある

いつまでゝ春べゝり心乃ゝ花むゝ　ちゝびゝ春ゆ春もへぬべし

○花ガチラズバ　イツデ山野春ニ心ガウカレテ居ルデアラウ　モシ花ガチラズニ

アツタラバ　千年デモ山ヤデタテウヤウニ只ハル

春ゆし　ゝらび

よみびゝ　ゝらび

春びゝふ花乃ちゝハゝ春ゆ花ゝ　ゝ春ゆ春ゝ

○花ハ今年チツテモ　又来年カラ後モ　春ゴトニ盛リハアラウケレドモ

ソノ盛リニ春テ見ルコトハ　コチノ命次第ヂヤワイ　ナニボ花ザカリガ毎年アツ

テモ 余ガナケレヤ又トルニハナラヌ サウ思ヘバアヽ残リオホイ花ヂヤ

花のむら〳〵芳の佐久〳〵バ弓〳〵て〳〵芳は又とかゝりき給まし

○花ハチツテシヽウテモ 又春ニナレバ年〳〵お咲ラズ定ツテ咲ク物ヂヤガ

世ノ中ガ花ノトホリニ定ツテカハラヌ物ナラバ ヨシテキタ昔モ又フタヽビ

カヘツテクルデアラウニサ 世ノ中ハヨタ昔ガフタヽビカヘルト云フハナイ

吟風弓〳〵ちつ〳〵佐久ものゆ〳〵バ此一本ハよそよといとゝ思し

○吹テクル風ニ枝ニデイヒツチラル、物ナラ 此花一本ハヨケテ吹テクレトイヒ

ニ サウ云フハナラヌモノナレヤ ドウモ散テモセウガナイ

まれ人もこぬものゆゑ弓〳〵當ちきつる花を〳〵てまる弓

○此花ヲ馳走ニ折テ生テオイテ 本タナラバ見セウト思ウテ 待ツ人モ本モセヌニ

アヽ嘗ノオモシロウ咲テ井タ アツタラ花ノ枝ヲオレハ折タワイ サテモヲシイ

コトヲシタフカナ 待ツ人ガ来ヌウチ井ナラ 折ラヲバヨカツタニ

こぬものゆゑふハ来もせざるふとしつふとも

寒霞咲きそめの高ぢの合ぢ 茂系おきうせ

ち〳〵ぢきそめ種あぢ〳〵れあぢ〳〵ぢ思ハ思ふ思ハ思ふてふる

○ヨニ春サク花ハイロ〳〵アルガ何ノ花デモ皆アダナ物ナレド ソレデモ誰ガ春

ノ花ハアダナトミテトニトヒカギツタ者ガアルゾ アダナ物ヂヤ〳〵トハ誰モイヒツヽ

咲テバ又ヤツハリ賞翫スルヂヤ

春霞は佐のちぐさかんしつる花はしるびく〳〵花はうぎかも

○霞ノ色ガイロ〳〵ニ見エルハ 春霞ノ多ヒイテアル中ナ山ノ花ノ色ガ霞ヘウツヽ

タノカイノ

左京元方

かすみたちぬる春の山べをそなたなる色ぞ山ぶきの花

○霞ノ立テアル春ノコロノ山ハ遠ウ見エルケレモ カノベツ遠ウモナイカシテ 吹テクル風ハ花ノニホヒガサスル

此うめを、法花経をよむ。

うぐひすをえてよめる みつね

花ゑだをたをらばちるとふぶきをへぶそうつりきる色ぬいでゝ人もとるとも

○ウツロウタ花ヲ見レバ アーヲシヤト思ウ心ガ花ニシミコンデ コチノ心ニデガサ

花ノ色ニウツリタワイ ヰヤウニ花ノ色ニウツリタ心ヲ ドウゾ染イロニハタスニイ

人ガ知ラウモシレヌホドニ 人ガ知テハアリアハウラシイコチヤ

おもかるしゝ。餓鬼ども。

ゑみしらぬ

うぐひすはなきてもとめよ山ぶきをたをりてかざしてはるをこそしる

○ウグヒスヨ鳴テ呼ベ ウグヒスヨ山ブキヲ折テ髪ニ挿シテ春ヲ知ル

○ウグヒスノナノ野ヘ来テアレバ ドコノ野ヘモ ウツロウタ花ヲ風ガ吹テチラスワイ

ウグヒスガ惜ミガツテナクノハ ダウリチヤ

吹風をなにうらみようぐひすはちるれやはなをあらぶるなるらむ

○ウグヒスガオレガチカクヘ来テ恨メシサウニ鳴クガ ソチハ花ノチルガ惜ウテ恨ミルナラ

アノ吹テクル風ヲ恨ンデナケサ オレガアノ花ニチヨツトナリモチドモフレタメナラコソ

オレヲ恨ミヤウケレ オレハ手モフレハセヌゾヨ スレヤコチガ知タコトデハナイワサテ

典侍洽子朝臣

ちる花ゆゑ　ふゝ　ふる雨　ふる地　ふゝ　ばら　猶　雪　花　おそ　ゝ　ふ　ぱら　やな

○菊テユク花ガ　惜ニデ　泣ノデ　チラズニトヽル物ナラ　コチモ　雪ニオトロウカイ

雪ニオトラヌホド　泣ウチレド　ナニボ　泣テモ　花ハドウモト　ヽラヌワイノ

仁和の中将乃みやすん所ゆ　ふ　合　せむと　て　ち

ちるとふらゝ　きる　藤原後蔭

花乃ちるちゝやうびゝき　ち　震　ゝ　ゆ　ゝ　ぶ　乃　ゝ　ぐ　ひ　ち　み　雪

○庭ノタツテアルアノ立田山ニ　雪ノナク声ガスルガ　花ノチルコガツラウ　ハ　ハ　テ

アノヤウニ　鳴ノカイ

うぐひすの　かゝ　ぐ　よ　め　る　ち　を

ちつゝへ　ぢ　おのゞ　ゆ　ゝ　ち　ち　ぬ　を　し　ま　ふ　お　ち　せ　ち　ら　ゆ　ゝ　む

○雪ガアノヤウニ花ノ枝ヲアチラヘ　コチラヘ　コヅタヘバ　自分ノ物ノアヲチノ風デ花ハ

チルモノヲ　ソレヲ誰ガ咎ニシテ　アノヤウニ恨メシサウニ　レキリニ　ゆ　ゝ　ぶ　コトヤラ　外ノ

物ガチラスカナ　ゾノヤウニ・ア

みてゆくこゝろ　ハ必ずきりふ　ゝ　ぶ　ゝ　ぶ　ゝ　ぶ

○ダレカレサソヒアハセテ 馬ヲノリナラデ打ツレテ ドレヤ見ニユカウゾ 此第一フル
京ハサゾヤ 雪ノフルヤウニサ ヒタ〳〵ト 花ハチルデアラウワイ
ち氣花をなふうゝみむ 雪中に氣身もちふたつむ 地なは
○花ノチツテユクヲ 何ノ恨メニウ 品ハウゾ コチガ身トテモ イツ一デモ 仇世ニカウ
シテアラウモノカイ 花トロレヤウニ オツケ 死ニデユク物ヂヤ 花バカリヲ早
ウチルトテ恨ミヤウヤウハナイ

小野小町

花の色ハうつりふるとわいたづらに ふるゝ身よふ 物ながめせ一ヤふ
○エエ〻花ノ色ハアレモウウロウテニウタワイナウ 一度モ見ズニサ ワシハ
ツレソフテ居ル男ニツイテ 心苦ナヨカアツテ 何ヲトンヂヤノモナカツタアヒダニ

長雨ガフツメリナドニテ ツイ花ハアノヤウニマア
雪ふるとハ男女のかゝるひまをつふ男女ハ中らひのことを云しも
雪中ヲもいつる多一此集歌のうにもかとけりいせ物語ウ
雪ごろつをる原氏物語ふまぐ雪ぢもあるごけるくびもこれし
仁和乃中ヲのみやちんどゝ物ハ恋ふ合せんと
り氣時ふよ色ろ そせい
雪ヲとふ仏をふふ ふよう花をむちる雪ごふぬきそぐ先む
○散テユク花ヲヨレイトロフ心ハ ドウゾ糸ニヨラル、物ナラヨイニ ソレタラソノ
チル花ヲ一ツ〳〵 ぞふ を糸デツナイデ チラヌヤウニトメテオカウニ
ぢぐ妙ぢぐえぬ 女乃おゝ〳〵 ぢつり多るに よみ〳〵 ぢう

春風

あづさゆみ春の風はいづくより吹くとも花を散らすなりけり

○一春ノコロ山ヲ越テクレバ　ドウモ道モヨケラレヌホド　花ガチツテ
クルワイ　アノ女等ガサ
宮雨降ル時きさいの宮の御方のうた
春の雨はなにとりあはるむとたちしをあやふしとはよどひぬ
○春ノ雨デ若菜ヲツミウトヨフテ来タモノヲ　アチラヘコチラヘチリ一ガウ花
デ　ワカナヲツム所ヘユク道ハ一キレテフミヨウテ　ソデモナイ所ヘキタワイコレヤ
山ちかくすでしうちのるよりある
ちる人のいとゝ白き時下のよはよを寒ゝ侍るべし。

春ごとにうつろふ色はあらそはぬ花ぞちりぬる春風ぞ吹く
○春　花ノチル時分ニ　山ニ上ツテ　ソノ花ヲ惜イクト思フニカ
美ノウチニモサ　花ノチルバツカリヲ見ルワイ
宮雨降る時きさいの宮の御方のうた
吹風を谷の水とはみながらもなほ花をこそ思ふ侍
○フキチラス風ト　流レテユク谷川ノ水トガ　ナイモノナズ　ミ山ノオクニカクレテ
咲テアル花ヲバ　ヒヤウモノカイ　ヒヤハスイニ　スヤ風ヤ川ノ水モ　花ノタ
メニメツメニワルイ一バカリデモナイモノヂヤ
志賀のうらかつらきのまうのぐもの花ぞいつもいろにて
藤の花のちるあをとよりてかつらのふよりみるおも

よそふんてかゝるもの人ふゆぢの花をひとつをれよ枝ハをるなと

○チヨツト立ヨツメバガリデ足モ為メズニヨソニアンテイヌル人ニ ハヒツウテイナス

ナ花ノ花ヨ　タトヒ枝ハ折ルトモ　ドウゾハヒツウテトメヨ

あるゝ蘆の若ちゝ雪わきる波人乃こゝろもちらあわりてし

みつ紙

ふんなるをよ見る

氣色ぜんふ咲るふぢ形ゝ立ゥりきゞでゆのゝ人のこゝろむ

○コチノ座ニ咲テアル花ノ花ヲ　アヤウニ人ガヒツカヘシ〳〵シテ　ドウモアステヽイ

ナレヌヤウニ　ヒメスラ　ヒメスラ　ドウ云フヤラ　エイ座デモナイニ

よゝ人ちゝび

ゝらぞ

いやちとかもちきあるゝふゝむゝちぶあれ小鳴のさくらの山吹のむ

○桜ザノ小嶋ノ峠ノ山吹ノ花ハ　ケフコノゴロカナ　ハヽヲ　ニサイメデアラウ

物白ハ二つ咲ともゆやもめ薄ゆ今ゝもいふゝ山ゝ

ちゝ風さゝ見ふゝ見つる色ゝ形ゝふ為さゝ見つゝ山ゝ咲きぬ花

○此山吹ノ花ワイ　春為ニヌレテ一入一サツタ色モドウモイヘヌニ　色ガリデ

ナレニ　香ニデガ為ニヌレテハ別ニテ　ニホラレウニホウ

花為。為の方へもかゝるもの。枝のゆゝひゝ。為ゝれでまくるあゝ。

山吹ちゝゝ形ゝ形ゝ花ゝ見ゝむゝ為ゝうゝ為ゝゝむゝ為ゝゝこゝとゝひこ形ゝふ

○山吹ハワヤノメヌ物ヂヤ　コヨナラサカヌガヨイ　花ガサイタラ見ニ来ウト

四ツテ極テオカシヤツメデアラウニ　ちゝ風方ガコヨヒミエモセヌニ　咲テモ何ノ

セニモナイフヂヤ　咲ククラ井ナラ　咲タカヒガアツテワケクタツトニモノヂヤニ　ソレデハ

よしの川のほとりの山ぶきの咲るを詠る　　為村卿

吉野にきしたちやなぶきの咲風の庭も新さへうつろひぬるか

○吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レバ　風ガ吹テチル　ソノ風デ川ノ水ガウゴクニ

ヨツテ　底ヘウツタ新ニデガチツタワイ

詠しらぬ

かきくれ井手の山吹ちるとふは花の盛ぬ[佳]抑也

○[一]井手ノ山吹ガハヤモウ散テシマウタワイ　ア、残念ナコトヲシタ

ツツト早ウ　花ノ盛リノ時分ニ来ツヤウニホテアンヤウデアツタモノ

山ぶきの花のさかりにあふとてきよりとゞかぬ物をとは

春はうとましよ春る　　さきい

思ふどち春の山べをうちむれてそこはいそぬ猛麻しそこの

○ソンデワソコヘイクトニテ定ツタ旅デハ　ヨソニトルノハウイ物ヂヤガ　サウイフ定ツタ旅デハナレニ　心ノアフタドウレ春ノ山ヘツレダツテイテ　一日日ノクレルニデ

アソンデ　イキガヽリニトツテミタイモノヂヤ　ソレデハオモシロイ旅麻デアラウ

春はさくらの花をよめる　　みつね

ちづさゆみ春の月はいるぞかくれもあへぬ山のはの月

○古今ニ梓弓春トツヾケテヨミテアルガ　一、コトニ三月日ガ早ウタツテ　矢ヲイ
ルヤウニ思ハル、　二、春ニナツテカラ一、メナニノ一、モナイニ　サテモ早ウタツタ（カナ
ウ）ト月ヲよめるハ、まことハ年ゝ春の事好ミバ有るべし。春乃
春の方ハ此月いとゞふきこめ。

やよひ　貫之

つゝゆき

なれとむる花しゝ折ら見バうゞひもをえてハ抱うく折わぬべうなると

○ナニボ惜デ呼テモ〳〵　花ハミナ散テニシウテ　呼ダデトニル花ハナケレバ　コレ
デハセンナイコヂヤト思テ　嘗モニヒニハ呼キトモナウナツメデアラウサウアリ
ソナコニ思ヒル　ソデ久レウナ女ヂヤニデ　飯村ろう

やよひのつごもりの方ハ山をちこちもふ山川より花の
なゞれるゝ　ぬりやぶ（閑）

此人ハ三月ハ姓をいゝぐべき例なるふ姓なきもい
ゞ。又ハ中ふ山名のぶを皆ゞ〳〵せるハ元のごとし。

花ちるゝ山ハ中ふ〳〵ちるゝ山ハ山ハ〳〵なりふきこ

○花ノ散テ流レル川スヂニソウテ居〳〵ミナカミノ方へ弱子テキテ見レバ
山ニハモウ花ハミナチツテニシウテ　ハヤ春モナイヤウニナツメワイ

春風惜ミてよめる　もゝかる

ちゝ〳〵ゞ花ゞ〳〵ふ春風ハうつるそとふ〳〵ちるもぬと思へば

○春ヲ惜ムケレ　モウニヨウセンヨトニリハセヌ　春ハモウタツテイヌル道へ旅ダチシタレ

バトニラヌハズギヤ　　寒ハ[二]ふるの孫ふいてるし。結句ハ。ぐ〜もちぬ

きびしいふことあて。見ぬふことあ〜。もべて見又いふといふ句をそへてい

へる係つてのふまし。見べをを。まの見ふとえてる流を。ゴ係〜。

寒雲ハ時きえの雲ふ合ちあ　おき風

夢〜ふえぞなけやうぐひを一ちせふ二〜ぐひとぐふうぐきまうは

○春ハ一年ノ内ニイク度モ来レバ立春ノ一ヂヤガ　サウハナラズ　[四]ゼメテ二度

トナリ[五]ブ来レバヨケレモ二度トモクル事カイ　タツタ一度ナラデハナイ春ヂヤニ

クレテユクハサテ〜ノコリオホイ一ヂヤ　ウグヒスハ　ズイブン絶ズ鳴テ恨ミヨヤ

イ　イカニモ鳴キドコロヂヤ

やよひのはごもり時日花つをもりかつりきる如ぐとも

みつ孫

アてしよ色法

うぐむべきはるゝはるゝふをあ〜もちる学ぐふ〜ゐぐふ〜ろ〜ろ〜の

○アノ花ガアヽリ惜サニ　一本〜チツテユク花ゴトニ　コチノ心ガツイテイクワ

アノ女ニ　サテモ〜アアホラシイ一ヂカナ　ツイテイタトテ　トメラレウ物デハナイニ

ず学みるろろ〜

やよひのはごもり時日　あのふりりふ物ぢ時花を〜ゴて

人ふ〜ふり〜ふ　おりふ〜の結花

ぬきつぐぐきひてをりはる事時ふちふ事ハいくらも行ぢと思へば

○此歌ノ花ハドウゾソコモトヘハ目ニカケウト存ジテ　今日ノ什あニヌ〜サ

ムリニ折リ[三]シタ　春ハ[四]ダイクカモアルデハアルマイ　モウ[三]当年ノ内ハ　タツタケフ

一日ナラデハ春ハナイトオモヘバ　法説下白地之を切だ。

亭子院ニ会うて春はたてのこと

うぐひすのこゑ聞こえぬうちにふるゝしるしやうぐひす乃ふるゝハ

○春ヲモウ今日バカリヂヤトハ思ヒ時デサヘ　花ノイトハ立テイヌルノガ伺シトモナイ

カサア　ソレデ丈ケ花ノ下ハ立サリトモナイニ　マシテケフギリノ春ヂヤモノ

ちるかぐみ一の花ぢを見る